

自慢の兄ずら！

shimasho

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スクールアイドル『Aqours』のメンバーの一人、国木田花丸に兄がいたら…という話。

恋愛メインだが禁断の愛だけは絶対に書かない。すなわち花丸個別ルートはありません。

でもメインヒロインは花丸です。

原作が終わりましたが、このまま突き進みます。

亀更新です。そう書いとけば許されると思っています。すいません。

花丸のかわいさにやられて勢いで書いた小説です。行き当たりばったりですが少しでも花丸のかわいさが伝わればと思います。

原作崩壊&キャラ崩壊注意。

2016/08/12タグ変更しました。

目次

本編

俺の妹がこんなに可愛い（事実を述べただけですが何か？）

1

先生。他人の妹は私の妹に含まれますか？

か？

9

今朝寝起きの妹にウィンクしたら泣かれた（実話）

20

とうとう1話の次回予告が回収されるだどっ…（嘘です）

32

【幕間】善子とヨハネ

43

違う、こんな結末は望んでいないっ（切

実）

52

二次創作の作者達が総じて曜ちゃん好きすぎる件

62

実は作者は妹系の作品が苦手だったりします。

74

【幕間】マリーゴールドの咲く頃に

87

【幕間】中学生日記

97

ずらも良いけど関西弁も良いよね

108

同情するなら出番をくれby果南

119

バカとオタクとシスコンと女神

132

保護者参観での子供自慢

145

前へ

157

【幕間】雨降って地固まる

171

風邪をうつすためにちゅーなんてしま

せんっ！

189

文化祭は一日で終わるので前夜祭とか

やったことなかったなあ

203

Today, Tomorrow, Yes

today

212

番外編

成人の日特別編 最終回じゃないよ！

ちがうからね！

222

本編

俺の妹がこんなに可愛い（事実を述べただけですが何か？）

「スクールアイドルを始める!?!マジで言ってるのか?」

「本気だよ。まるも見てるだけじゃ嫌だ。他人に合わせたわけじゃなくて本気で心の底から”やりたい”って思えたことなんだ。だから…。」

ある日の国木田家の夕食。食卓を囲むのは僧である父、専業主婦の母、長女の花丸。そして花丸の兄であるこの俺。

「一郎丸」。

「違う。他人のモノログに入ってきた上にポケをぶっこむな。馬鹿親父。」

この前の金曜日ロードショーに引きずられすぎだろう。いい話だったけど『バケモノ〇子』。親父これが最後の出番かも知れないんだぞ?開始早々で悪いけど。

「それで?すくーるあいどる?って何をするの?どうしてやりたいってまるは思ったのかしら?」

お袋が親父のボケを華麗にスルーし、ひらがな発音で尋ねたところ、花丸は第4話：もとい『スクールアイドル部』に入るきっかけとなったエピソードを聞かせてくれた。

俺は国木田徳丸^{とくま}。まるの2歳上の高校3年生だ。まるが通っている浦の星女学院が家の最寄りの高校ではあるんだが、いかんせん女学院なので少し離れた沼津の公立に通っている。

昔から本を読んだり歌を歌ったりと文化系だった妹とは正反対に、体育会系の活動が好きだった。小学校と中学校では野球部に所属しレギュラーとして活躍した。高校に入って部活には入らなかったが、ダイビングに行ったり山登りをしたりしている。

体を動かしてないと落ち着かない性分である自分だが別にカラオケとか楽器とかが嫌いなわけじゃない。まるには及ばないが歌は好きだし、ピアノも個人的に習っていたので多少は弾ける。

成績は中の上程度だ。これで成績が良かったらキャラ設定上かなりのハイスペックになってしまう……らしい。

自己紹介はこんなもんかな。まあおいおい詳しいことは分かってくれると嬉しい。

父は祖父と一緒に寺で住職をしている。俺も将来は継ぐんだろうが今はまだ深くは考えてない。母は専業主婦のためずっと家にいる。と思ってたが、意外と忙しいらしい。一日のスケジュールを聞いてみるとプライベートな時間はほとんど無かった。むしろ父の方が多いためである。

みんなもお母さんには感謝するんだぞ？

妹との仲は悪くない。むしろ良い方だと思う。小さい頃はよくお寺の中を一緒に走り回ったし大きくなってからも勉強を教えてあげたり、あいつの所属する聖歌隊の合唱を見に行ったりしている。

もちろん”世間一般での”仲が良い兄妹だ。”ラノベ界での”仲が良い兄妹ではないのでそういう展開にはならねえよ。

だから、あいつの助けになるようなことはできる限りやってあげたい…んだが。

「踊りを教えてほしいと言われても…俺知らねえし。」

まるで食卓でスクールアイドルについて話したのは両親に部活の許可をもらうためと、もう一つ。俺にダンスを教えてほしいと頼むためだったらしい。

いや、何でだよ。

「俺ダンスとかしたことねえし。その子達のパフォーマンスを見たこともねえもん。さすがに無理だ。」

「それもそうずら。だったら今度一緒に練習に来て踊りを覚えるずら！」

「……ええー……その部活って女子だけなんだろう？俺が入っちゃ駄目じゃん。」

「大丈夫。徳兄いに関しては何違いはおこらないずら！」

「おいこらどういう意味だ。」

「と、とにかく！まろがしっかり踊れるようにサポートしてほしいんだ！」

な……なんか今日のまるは押しが強いな……。いつもならこんなに強引に話を進めたりしないし。

「俺に踊りを覚えてほしいっていうのは家で練習するってことだよな？なんでそこまでしようと思うんだ？」

今までのこいつだったたら絶対にしなかっただろう。まるはさめてるって程でもないが、皆と一緒に何かを一生懸命やるようなキャラではなかった。どちらかというと一人

が好きだし。公式設定で『所詮人間は一人』とか言っちゃうくらいだし。俺もだが。

そんなままるがやる気に満ちあふれている理由を聞いてみると、真剣な表情で語ってくれた。

「おらは運動が苦手ずら。体力もないし物覚えも悪い。正直自分がスクールアイドルに向いているとは思わないずら。だけど…。」

「だけどルビイちゃんが言ってくれたんだ。まると一緒にスクールアイドルやりたいって。千歌さんも言ってくれた。大事なのはできるかどうかじゃなくて、やりたいかどうかだって。」

「大先輩のスクールアイドルも当時は『自分はスクールアイドルに向いてない』って思ってたらしいし。…なによりまるはまるを信じて誘ってくれた二人の気持ちに応えたいんだ…。変かな?」

これで変とか言うヤツはお兄ちゃんが捕まえてカッパの着ぐるみを着せた上で荒川に捨ててきてやる。

「……までまるがワガママを言ってきたのは初めてだしな。」

「…よし。できる限りの手伝いをしよう。」

「いいの？迷惑じゃない？」

「大丈夫だ。世の中の兄という生き物は妹の相談には必ず乗ってあげないといけないんだよ。」

イニシャルK。Kのシスコンで有名な兄がそんな趣旨のことを言っていた気がする。

「とりあえずまるに教えられる程度には踊りうまくならないとな。そのアイドル達の名前。何て言うんだっけ？」

「A q o u r sだよ。」

「そうか。そのA q o u r sのライブの映像とか無いのか？」

「あ、それならルビイちゃんが…。」

こうして俺、国木田徳丸は浦の星女学院スクールアイドル『Aqours』と関わっていくことを決めた。

俺が花丸のために出来ることなんて限られているだろう。でもやれることが少しでもあるならやってあげたい。

俺はあいつの兄で。

生まれたときからのファンなのだから。

「なあ、まる。まるがどうしてもって言うならお兄ちゃんまると結婚してあげても良いぞっ。」

「それは良いすら。」

「良いってそr「遠慮するって方の意味。」∴はい。」

先生。他人の妹は私の妹に含まれますか？

翌日は土曜日では学校も休み。部活にも参加せず塾にも通っていない俺は昼過ぎまで寝れる日のはずだった。だったのだが。

「じゃじゃん！これがまるの兄ずらー！」

なぜか朝から自分の通っていない高校の屋上で。

「私と一緒にダンスレッスンする予定だけど、何か雑用とかあれば積極的に使ってもらって欲しいです！」

年下の美少女5人に囲まれて。

「「よろしくおねがいます！」」

頭を下げられてるのは何でなんだろうなあ……。

遡って思い出されるのは……あれは……そう……1時間前の事だった。意外と直近の事だった……。今の溜めは文字数稼ぎだ。ついでに今の一文も（ry

「兄ちゃん朝だぞこらー。起きないと遅刻しちゃうぞー。」

朝8時。平日だったらこの時間には家を出ていないと間に合わないが、今日は休日。気の済むまで惰眠をむさぼる予定だった。

目を開くとこちらを見つめる妹の姿。手には俺の掛布団の裾が握られている。どうやら布団をひっぱがしてでも俺を起こしたいようだ。

あと、どうでもいいけど俺の部屋とまるの部屋は別だが、鍵などは無いため割と自由に行き来できる。基本的にまるがこっちに来ることのほうが多い。

さて。起こしに来たこいつをどうしようか。

まるがいっしょにそとにでたがっています▽

あなたはどうしますか？▽

・ともにタイヨウのくにのぼうけんのたびへ

・ことわってひとりでトコヤミのくにへ

・なぜかここで大喜利↑コレダ！

「お題。俺が一瞬で飛び起きるような一言。」

ってか何を調べてたの?……妹に言われた一言?な、なるほど。

「二つ目はどくれにしようかな。」

笑顔でスマホをいじるまるでした、まる。ってかお前ネットとか苦手な設定どうしたのよ。「よし!」おお怖い。次は吐血しないように身構えないと……

「全くこれだからゴミいちちゃんは。」

……………

「あれ?徳兄い?おーい?停止してる…。え?…息をしてない?!?そこまでショックだったの!?!」

……………はっ。なんだ?ちよつと意識が飛んでたぜ。

「それで?まる。普通に『全くこれだからお兄ちゃんは。』とか言ってもなんの驚きもな

かったぞ？」

「…しかも記憶ねつ造してるし。はあ。じゃあ最後いくよ？」

よっしやどんと来い！

「もお！お兄ちゃん妹のおっぱいさわりますg」はい起きましたー！」

あぶねえ。何言いだすんだこいつは。それはダメなやつだろう。あの兄妹だからこそ、いやあの兄だからこそ許される台詞だろう。俺はあそこまでじゃない…と聞いた。

まるがにやにやしなから勝ち誇った顔でこつちを見てくるが無視。

こんな朝っぱらから起こしに来た理由を聞こうではないか。

「さて。なんでまるはこんな朝早くに俺を起こしに来たのかな？」

「昨日も言ったけど、練習に着いてきてほしいんだ。私一人の力じゃ皆の踊りにはついていけないし、迷惑をかけちゃう。だから徳兄いと一緒に練習して、家でも練習が出来

るようにしたいんだ。」

昨日の今日でか……。なんかまるは家の中だと行動力とか決断力とか増すよなあ。このお寺にステータス付与の効果でもあんのか？

「ビデオじゃダメなんだっけ？」

「それだと話の展開が……。じゃなくて、やっぱり的確なアドバイスをくれる人が欲しいから。」

なんか今すごいメタな発言を聞いた気がするが今更なのでスルー。見ればさつきまでの馬鹿な会話が嘘のようにまじめな表情をしているので、俺も意識を覚醒させる。

「俺が行くかも知れないってことは他のメンバーは知ってるのか？突然年上の男が押しかけちゃ悪いだろ。」

「大丈夫。昨日のうちにラインで言つといたよ。」

「みんな何て言つてたんだ？」

「千歌さんとか曜さんは大歓迎モード。梨子さんはちよつと緊張してるみたい。ルビィちゃんは会つたことあるから大丈夫だつて。」

そうか。まああまりに俺が悪影響を及ぼすようだったら引き下がれば大丈夫かな……。その反応だと何とかかなりそうだが。

一度行つてみなくちゃ始まらないっほいな、これは。

「よし。良いよ。行こうか。何時からなんだ？練習。」

「えつと9時半に屋上に集合。」

「じゃあぼちぼち準備しないと。着替えるから少し出といてくれ。」

「はーい。」

…ちなみに妹の胸を触ったことはないぞ？揉みしだいたことなんてもつとないからな？勘違いすんなよ？

そんなこんなで冒頭に戻る。

「おいまる。お前俺の事なんて言って紹介した？」

「優しくてとても頼りになる兄が千歌さん達の話聞いて『ぜひ俺にできることをしたい』とか言い出したのでとりあえず連れてきても良いですかって。」

なんでだよ。普通に自分が踊りを覚えられないからって言えばいいじゃねえか。「だってそっちの方が面白そうだから。」案の定だよつ。

「ええと。花丸の兄の国木田徳丸です。妹がいつもお世話になってます。まるはちつさい頃から人見知りで人前で踊るなんて考えられなくて…「徳兄いそれ長くなる…ね。じゃあこっちの自己紹介をやっちゃいましょう。良いんです。あれはああいう生き物なので。」おい。」

するとややオレンジっぽい髪の子…いやだいぶオレンジだけでも、が一步前に近づいてくると。

「こんにちは！徳丸さん！私は高海千歌です！花丸ちゃんから話は聞いてます。Aqoursのお手伝いをしてくれるんですよね？これからよろしくお願いします。」

そう言つて深々と頭を下げた。…お手伝い？あれ？踊るだけじゃなかったの？なんかおかしくない？

ちよつと思考停止していると隣の赤みがかつた茶髪の子が口を開く。

「ええと…桜内梨子です。一応Aqoursの楽曲の作曲をしています。これからは作曲のお手伝いもしてくださるつて聞いて…。本当に助かります！私アイドルの曲とかあまり聞いたことなくて…。アドバイス、お願いしますね？」

この子がまるの言ってた梨子ちゃんか。俺に会うの緊張してたみたいだけど、これなら普通に話せそうだ。

そいで？作曲のお手伝い？ほほう？

「お兄さん作曲とか出来るんですね！あ、渡辺曜です。特技は飛び込み！A q o u r s では衣装を担当してるんだけど、お兄さんが助けてくれるって聞いて嬉しいです！それでは！敬礼！」

とりあえず銀つぽい髪の元氣ツ子には敬礼を返しつつ。衣装ときたか…。

「ちよつと待ってね皆。まるから俺のことなんて紹介されてる？完璧超人とか？」

「何でも出来る自慢の兄」

…あ、そう。それはそれで普通に嬉しいわ…。でもいくらお兄ちゃんパワーを發揮したところで無理なものは無理というか。

「けどね？3人も。さすがに作曲とかはしたことないし、裁縫も家庭科で習う以上のことは出来ないからアイドルの衣装とかは…。そこまでの時間はとれないというか…。」

「そつか。ルビィ、徳丸さんが作る曲とか衣装とか凄く楽しみにしてたんだけどなあ…。でも忙しいならしょうがないよね…。」

「…だからできる範囲での協力になっちゃうけどよろしくね？」

ここにはもう一人俺の妹みたいな存在がいたのを失念していた…。お兄ちゃんパワー倍増キャンペーンだよ！

赤いツインテールをした引つ込み思案の女の子。だけどそんなところがまると似ているのか中学校からの付き合いで、家にも何度か遊びに来た子。

彼女の名は黒澤ルビィ。俺も何度か話したことはあるが、守ってあげたくなくなるようなタイプの妹属性持ちだと記憶している。

そんな子にこんな悲しい顔をさせるわけにはいかないのだよ。

「やった！徳丸さん！これからよろしくお願いしますね！」

ああ。その笑顔を見られただけでお兄ちゃん満足だよ。

ここに『浦の星女学院スクールアイドルA q o u r s』の作曲手伝い兼衣装手伝い兼雑用兼ダンス見習いが誕生した。

彼と彼女達は時に笑い、泣き、ともに汗を流してお互いにさまざまな影響を与えている。

彼らの行く末に待ち受けるのは多くの苦難。だがその先には光が…。
どうか試練を乗り越えられますように。

それでは聞いてください。A q o u r s で『青空J u m p i n g H e a r t』

く 音楽が流れています。心の中で聞いてください。く

「……………これで終わり？」 「終わりずら。」

今朝寝起きの妹にウインクしたら泣かれた（実話）

「ワン、ツー、スリー、フォー。ワン、ツー、スリー、フォー。」

屋上に曜ちゃんのリズムを刻む声が響く。それに合わせて2年生三人組が踊っている。

「ワン、ツー、スリー、フォー、つと。とりあえず新曲はこんな感じの振り付けを考えてるんだけど…。どうかな？三人から見て。」

「すごく可愛いです！」

「良いと思うぞ？そこまで複雑な振り付けとか強い体幹を必要とする仕草とかもないみたいだし。これなら1年生二人も踊れるだろ。」

準備体操を終わらせた後、俺は2年生に今度のライブで披露する踊りを見せてくれるように頼んだ。スクールアイドルの踊りがどんなものなのか知れたかったからだ。

まあダンスなんてしたことのない俺からしてみれば、たぶん踊れるやろー、くらいのことしか分からなかったけれど。

「そうなんですよね。私はもう少しきつい動きも出来るんですけど、千歌や梨子ちゃんにはきつい面もあって。」とは曜ちゃんの談。

「う……。だって私達運動とかあまりしてなかったし……。まあそれは置いて、じゃあ早速踊りの練習に入ろうか!」

誤魔化したな……。どうやらA q o u r sの運動神経の良さは、曜ちゃん<千歌ちゃん>ルビイちゃん、梨子ちゃん<まる>まる、みたいなものらしい。運動しないでどうやってそんなスタイルを維持しているのか気になったが聞かないでおく。普通にセクハラだった。こんなの妹以外に言ったら妹に怒られちゃう。

「千歌は運動しないでどうやってそんなスタイル維持できてるのか不思議だよね。前から気になってたけど。」

「私食べても食べても太らない体質みたいなんだよね。ダイエットとかしたことないし。」

おっと俺の代わりに曜ちゃんが聞いてくれたぜ。それを聞いて梨子ちゃんがうらやましそーな目線で千歌ちゃんを見ているけど、十分君もやせてるよ?無理にダイエットしなくて良いと思うよ?「私は好きな食べ物も我慢してるのに……。」とかブツブツ聞こえたけど聞かなかったことにおこう。

さて、そんなこんなで練習に入る俺たち。

2年生三人で1年生二人に教えている。最初はマンツーマンで俺にも教えようって話だったが謹んで辞退申し上げた。だって俺は本来教わらなくて良い人間だ。まるの

ワガママを先輩方に聞いてもらっておいでもらってる人間なんだ。だからわざわざ人を割いてもらうよりは、1年生に重点的に教えてもらった方が良いと判断した。

まああいつらへのアドバイス聞いとけば大体覚えられるし。

「い〜い？花丸ちゃん。ここはクルツと回ってぎゅい〜んって腕を振ってズビシッだよ。」

「いや、千歌。それじゃ分かんないでしょ。ターンした後腕をクロールで回すみたいにならな〜。そうそう上手。そうした後、横にまっすぐ広げてみて。：オツケー。その調子。」

「うっ…。よ、よし〜ルビィちゃん。次はジャンプしながらキュピツて足を作って、着地したら白鳥と蝶の間みたいなのポーズ、だよ！だよね？梨子ちゃん！」

「ごめんなさい。現代文は得意だけどその言葉はちよつと理解できないわ。ええとね。ルビィちゃん。ここは…。」

「ううう…泣」

千歌ちゃん…。なんか第一印象からアホの子だろうな〜とは思ってたけど、やっぱり面白い子みたいだ。

同級生二人に相手にされず、寂しそうにしている。そのまま次に何をするのかなくと観察していたら急に顔を上げてこつちを見上げた。目が合う。さびしそうなめでこちらをみている。

ちかがさびしそうなめでこちらをみている▽

どうする?▽

・はなしあいてになってあげる

・せいっぱいのえがおではげます

・あえての大喜利

…聞きたいこともあつたし、ここは最初の選択肢かな。俺もさつき会つたばかりの人に「お題!」とか言うのは抵抗あるし。

「千歌ちゃん、ちよつと良いかな?」

ぱああ、と曇っていた顔を輝かせて「はい!大丈夫です!」うん。良い返事だ。

「さつき千歌ちゃんが二人にアドバイスしてた踊りつてさ。こんな感じで良いのかな。」

ええと、クルツと回つてぎゅいゝんつて腕を振つてズビシつ。からのジャンプしながらキュピツて足を作つて、着地したら白鳥と蝶の中間みたいなポーズ…だな。

……ん?

「どうした?なんか変なところあつたか?」

わりと今のはうまく踊れたと思つたんだが…。

「いや…。すごく上手でした…。ていうか、私のさつきのアドバイスで分かつたんですか!」

「うん。まあ俺も直感で理解するタイプの人だから。でもそうじゃない人にとってはあのアドバイスは伝わりにくかったんじゃないかな。」

「うっ。やっぱりそうですかね…。なかなか言葉で表現するって難しくて…。」

ちよつと沈む千歌ちゃん。そして。

「後輩。」

「ん？後輩？」

「はい。私今まで部活とかクラブに入ったことがなかったので、花丸ちゃんとルビイちゃんは初めて出来た部活の後輩なんです。まあスクールアイドル部自体がつい最近出来たものではあるんですけど…。」

「だから二人には私がμsから教わったことを一生懸命伝えようと思ったんです。仲間との努力。練習を乗り越えた達成感。ライブを終えたときの感動。時にはぶつかり合うこともあるかも知れませんが。それでもつと互いを分かり合えることが出来るのなら。そして、みんな夢を叶える体験をさせてあげたいって。」

ちよつと空回りしちゃいましたけど…。だって今日は二人が正式に入部してから初めての部活でしたしねっ。そう言うてはにかむ千歌ちゃん。

「…μ s って確か千歌ちゃんとかルビイちゃんが憧れてるっていう？」

「はい！スクールアイドル”っていう文化を最も発展させたと言っても過言ではないほどの伝説的なグループです！私はμ s みたいに輝きたくてスクールアイドルを始めようと思ったんですよ！」

μ s のことを嬉しそうに述べる女の子を目にして俺は何も言えなかった。誰だ？この子をアホの子とか言ったヤツは。

昨日入部したばかりの二人のことをこんなにも思ってくれてる。そして心の中になんかに輝いているものを持つてる。

この子はきちんとした目標がある。そして仲間達をそこに連れて行くことの出来る能力がある。なぜかそう思えた。この子がいればなんとかなると思わせてくれるカリスマ性があるのかもしれない。

「……るさん？徳丸さん？どうしたんですか？急に黙り込んで。」

…いかん。考え込んでしまった。見れば千歌ちゃんだけでなく他のメンバーもこちらを見ている。そんなに沈黙が長かったか？精々6, 7行のことだと思っただが。

「いや、なんでもないよ。君たちが憧れるμ s ってどんなグループなのかなあと思っ
ね。」

誤魔化すしかないだろう？

目の前の女の子の魅力に気づいて見とれてました…なんてとてもじゃないけど言えないんだから。

この子なら妹たちも安心してついていけるだろう。と、良い感じに第3話を終わらせようとしたんだが…。

「ハーイ！調子はどうカシラ？」

「理事長！」

金髪美少女（今回はロシアではなくイタリヤ系アメリカ）が屋上の扉から出てきた。

肩まで届くくらいの金髪に髪と同じ色をした大きな瞳。胸元のリボンは最上級生である水色をしていて、誕生日は6月13日。血液型はAB型。身長は163センチでスリーサイズは上から…。」

「ちよ、ちよつと！何言ってるのよ！つていうか誰よ！このビッグなボーイは！…つて徳丸？」

「ビッグなボーイで…。よお、久しぶりだなマリー。一目で分かったぞ。お前変わんねえな。」

「久しぶりね！また会えてハッピーだわ！」

「俺は一瞬わかってもらえずアンハッピーだけだな。俺はお前のこと分かったのに…。」

「あなたが変わりすぎなのよ…。この2年でどれだけ身長伸びたのよ…？」

「15センチくらいだな。今179ある。けどお前もだいぶおっきくなっただと思うぞ？特に…とか。」

「セクハラで訴えるヨ？」「ごめんなさい。」

そいつは小原鞠莉。俺の中学校の同級生だった。何事にも明るく元気に挑んでいくやつで、その性格柄か男女の境なくいろんな人と仲良くしていた。まあ俺は男子の中でも特に近くにいた気がするが…。

いやだってコイツほんと猪突猛進というか、自分の思い付きの行動の後始末をしない

というか…。そのせいでおれがどれだけ苦労したか。そんな俺の様子を見て楽しんでる節もあったけどな！二年前も突然いなくなるし…あれ？

「お前いつ戻ってきたん？ニネンブウリ？だっけか？」

「なんかその発音には悪意を感じるけれど…。ええ、戻ってきたのはこの前よ。話せば長くなるから略すけど、いろいろあつてこの学校の理事長になることになったの。あなたこそなんでここにいるのよ？ここ女子校よ？」

「理事長で…まためちやくちやな…。まあ俺の方こそ話すと長くなるんだが…妹の部活の応援だな。」

「短つ。文字にして9文字じゃない。…妹？あら、もしかしてこの子？トツクの妹だったの？」

「ああ。これからよろしくしてあげてな。」

久しぶりに話すつてのにスラスラ言葉が出てくるなあ…。今日は朝から妹の友達つていう微妙な距離感の人たちと話してたわけだし、知らんうちに気を使つてたのかなあ。

「あのお。徳丸さんつて理事長とお知り合いなんですか？」

ポカンとしているメンバーを代表して千歌ちゃんがおずおずと尋ねてきた。それに答えたのはなぜかマリィで。

「ええ。徳丸は私の中学校の同級生よ。中学の時は私も内浦にいたしね。」

「普通今の質問だったら俺が答えねえか？ 徳丸さん」が主語だろう。どう考えても。」

「細かすぎるのよ昔からトックーは。…いろいろした仲じゃない？」

「…そのいろいろに『給食で出る苦手なキムチを食べてあげる』とか『朝が弱いマリーのために代返してあげる』とか『女の子どうしの喧嘩に俺を召還する』とかが含まれるんなら確かにいろいろしたな。」

「感謝してるわよ？」

…そーいう問題じゃないんだけどなあ。ってか中学校で代返ってどうやってたんだ当時の俺。

ほら、まだ皆ポカーンって顔してるじゃねえか。そんな中まるが不安そうな、それでいてちよつと期待した目をしながら口を開くと

「義姉候補ずら？」

「それはない」

おお…ハモってしまった。

「いや、確かにコイツと仲が良いのは認めるが恋愛感情があるかって聞かれると…なあ？」

「そういうことは本人の前で言わないの…でもそうね、トックーは私が困ってたら助けてくれる時もある大事な親友よ。好きかって聞かれたらもちろん好きだけれど、それ

は私がレモンを好きって言うときの好きね。loveじゃなくてlikeみたいな。」

マリーさんや…。likeとはいえ恥ずかしげもなく好きとか言ってくださるなや…。ちよつと照れる…(／ω＼)

そしてマリーはいたずら顔で

「だからあなたの大切なお兄ちゃんを取ったりしないわよ?」

「大丈夫です。それは無いんで。むしろ徳兄いに引き取り手がいるなら早く連れてってほしいすら。」

…マリーの言葉に食い気味に被せてきた…。辛辣だなあまるは。そこは「ベ…別にそんなんじゃないんだから!イミワカンナイ!」くらいのセリフを恥ずかしがりながら言つて欲しかったぜ!あれ?…思つた以上に心にダメージが…。

そんなまるの返しにマリーは一瞬ビツクリした顔をしてたが、「ぷつ。あはははは!」と腹を抱えて笑い出した。

「はあ…はあ…、良い妹さんを持ったわね、トツクー。ふふつ。そうね、こいつには早くいい貰い手が見つかると良いわね?」

「はい、ずらー!」

こんな時だけいい返事をしなくても…。兄ちゃんがいなくなっても寂しくないのか

？俺はまるに彼氏ができたら…。想像できねえな…。怒りと嫉妬とバカとテストと召喚獣で何かに変身しそうだ、とだけ言っておこう。（ほら。考えるだけで壊れてしま
う。）

さて、だいぶ長い時間俺たちのせいで練習を中断させてしまった。ぼちぼち残りの躍りを覚えないな…。

??? 「へえ…。徳丸さん彼女とかいないんだ…。」

とうとう1話の次回予告が回収されるだつとつ…(嘘です)

何年前だっただろうか。多分10年くらい前だったと思う。俺が小学校低学年の時の話。

放課後、近所にある公園で俺は同級生とサッカーをしていた。その頃の俺はもうすでに運動することが大好きで、まだ日が高いうちに学校が終わると日が暮れるまでずっと公園で遊んでいた。

そこに母親が幼稚園帰りのまるを連れてくることも珍しいことではなかった。

「夕飯が出来るまでここで遊んでらっしゃい。」

母はそう言つて1時間ちよつとの間俺とまるを公園で遊ばせたものだ。

まるはまだインドア派に完全に所属していたわけではなかったから、砂場とかで時間をつぶせていたんだ。

まるもずっと一人だった訳ではない。もしまるが一人で砂遊びしてたら俺と一緒に遊んでやるに決まっているだろう?というか、一人になる時間を俺が作るわけ無いだろう?

そこにはまるの始めて出来たといつても過言ではない友人がいたんだ。

少し紺に近い黒髪を頭の右側でお団子にした、ちよつと利発そうな女の子。

津島よ…よ…ヨ？なんだったかな。ど忘れしたけど、その津島さん家のよつちゃんがよくまると遊んでくれていたから俺もサッカーに興じることができた。よつちゃんが早めに帰ることも多かつたが、そのときは俺がまると一緒にいてあげたし、よつちゃんのお親と顔を合わせることもあつた。

ある日、俺の友達が用事があるとかでみんな早く帰つてしまい、久々に二人と遊ぶかー、今日もよつちゃん元気かなーとか思いながら二人の方に行くと何やらよつちゃんが滑り台の上に立つて宣言していたことがある。

俺の中でよつちゃんが心に残り続けるきつかけとなつたエピソード。

「私、本当は天使なの！いつか羽が生えて、天に帰るんだ！」

「ずらあ~~~~~！」

え、ちよつと待つて天使はここにいないじゃない。大天使ズラ丸が。

そう思うのは俺が成長して心が汚れちまつたからであつて、当時の俺はよつちゃんのこと言つたことに衝撃を受けていた。

「天使!?かっこいいね！じゃあ飛べるようになるんだ！」

「あ、徳くん…。そうなの！飛べるようになったら徳くんにも見せてあげるね！」
「本当？じゃあ約束しよう！」

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲—ます。指切った！」

今から思えば他愛もない子供の約束だが、この日の出来事は俺の心の中に強く残り続けた。

だって友達が天使だったんだぜ!?ギャルゲーで言えば壮大な伏線で、将来成長したこの子がメインヒロインになる流れだろう？

まる達が幼稚園を卒園して、俺が部活に入って、公園でよっちゃんとは遊ぶことができなくなって、天使とか信じなくなっただけ。

それでも何故か津島善子という女の子は頭の中に残り続けた。

あ、そうだ善子だ善子。俺のおばあちゃんと同じ名前だったな。

時は現在に戻り、俺は先日のマリー襲撃以来2回目のA q o u r sの練習に顔を出していた。

今日も今日とて5月とは思えない気温。時折吹く風が潮のにおいを運んでくるが、そんなもんじゃ涼しくならんっ！なんで屋内で練習しないんだこいつらは。

「だってどこもスペースないんですもん。」

「もーんじゃないもーんじゃ。マリーに相談しなかったのか？」

「確かに理事長ならなんとかしてくれそうですが…。千歌ちゃんが『ム』が練習してたところで私達もやる！』って聞かなくて…。」

「まあ良いと思うすら。屋上みたいに暖かいところ、まるは好きだな。」

「私も屋外で泳ぐのとか好きだし…。千歌は言い出したら聞かないからねえ…。」

…そう言われると俺は文句言えねえな。実際こいつらの方が運動量は多いし。

「はあ。わかった。熱中症には気をつけるんだぞ。」

「「「はーい！」」」

さて、練習始めるか…：…ん？なんか屋上の影から見覚えのあるお団子頭が…？

あ、まるも気づいたみたいだ。「すぐ戻るぞら！」そう言って追いかけていった。うむ、あれは俺も知ってる人のような気がするけど…。ま、気にしなくて大丈夫かな。あ

とでまるに話聞いところ。

「墮・天・使・ヨ・ハ・ネｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

い、いかん。聞くんじゃなかった、俺の腹筋が…腹筋があああ…。

「そんなに笑うことじゃないぞら！善子ちゃんはしばらく登校してなかったんだから。」
「ひい、ひい……。…そうだな、悪かった。よつちゃんそんなに自傷ダメージ受けてたんだよな…。」

天使だったはずのよつちゃんは墮天してました、まる。

やべえ。俺の中でのよつちゃん像が音を立てて崩れていく。誰だメインヒロインとか言ってたヤツは。

「でも明日から学校に顔出すって言ってるんだろ？もう大丈夫なんじゃねえか？」

「うん。まるもそう思うよ。でもまるにあんな頼み事するくらいだし、まだちよつと不安が…。」

「頼み事？なにになに？おもしろいこと？」

「さつき爆笑した人には教えないぞら！」

「ええく…。」

まあいいや。さすがに俺が口を出せる話じゃねえし。だつてよっちゃんとももう10年も話してねえしなあ。久々に会って話したいけど、また今度でいいや。

そう思っていた時期が自分にもありました。これは介入せざるを得ない。少なくともルビィちゃんの兄を（心の中で）自称するものとしては。

「正座。」「はい…。」

俺の前には6人の正座する美少女達。もちろんAqoursの5人withよっちゃんである。

実は今日浦の星に顔を出す予定は無かったのだが、とあるサイトにアップされた動画を見て授業が終わり次第急行した次第である。

言うまでもなく墮天使Aqoursだが。

「大体なぜルビィちゃんにこの台詞を言わせた。これじゃルビィちゃんの良さを伝えられてないだろう。逆に伝わったかも知れんがな！（錯乱）」

「ル、ルビィ、か、可愛くなかったですか?」「可愛いに決まっているだろう!だが俺はそんなルビィちゃんではなく、もつと小動物系のルビィちゃん推しなのだ!それなのにこんな破廉恥な格好をさせおつてからに…!」

「さつき同じことを誰かさんに言われたような気がするなあ…。」

「千歌ちゃん!」「は、はい!」

「君はまだこのグループの方向性を決めきれてないんだと思う。でもだからといって取りあえず目を引けば良いって訳では無いと思うんだ。もつと一人一人の魅力も考えてごらん。例えば今回の墮天使はなぜ上手いかなかったのかをね。」

「一人一人の魅力…。」

「うん。そしてよつちゃん!」「はい…。」

「久しぶりだね。まさかこんな形で再会するとは思わなかったけれども。俺 A q o u r s の雑用みたいなことをやってるから学内で会ったら声かけてね。」

そして今回の失敗は自分のせいだとも考えているかのような神妙な顔で俯いている彼女にだけ聞こえるように顔を近づける

「もし今回のこの子達の失敗が自分のせいだと考えていて、中二病を完全に卒業したいと思ってるなら二日後の朝に子供の頃遊んでいた公園に来なさい。占いの道具とかも持ってね。俺が処分してあげよう。」

とだけ告げる。

「よし!俺からはこれだけだ!あとは自分たちで反省会!」

さてさて。みんな浮かない表情だけど、どうなるかなあ…?…なんかルビィちゃんだ

け顔が赤い気がするが…。ま、まあいいや。

正直、俺はよっちゃんがこのまま中二病を卒業したが良いと思ってる。そいで普通に高校生活に復帰してもらいたい。

ただ、彼女の行動が普通じゃ嫌だという思いの裏返しだとしたら。

普通じゃなくても個性として輝ける場所を提供してあげたいと思うんだ。その点俺はこの子達なら明日には動くって信じてる。だから2日後に設定したわけだしな。

なんだ？まる今日はすいぶんと早く寝るな。

うん。明日の朝ちよつと用事があつて。

ふうん…。わかった。お前にはこの『公共のトイレで国木田家の恥をさらした罪』の容疑がかけられているのだが、その裁判は明日に延期しよう。

な…その動画をなぜ徳兄いが…。…まさかのルビィちゃんの裏切りずら!!!

まあまあ落ち着いて。…明日頑張れよ。

はあ…。分かつてるずら。おやすみ。

おう。おやすみ。

また時は跳んで（時って「跳ぶもの」だよな。間違っても「飛ぶもの」じゃないよな。まあ「駆ける」ものではあるが。）約束の朝。

俺が公園に到着すると既に彼女は着いていた。

「わりい。待たせた。」

「いえ…大丈夫です。」

そしてこっちが口を開く前にすううううう、と息を吸い込むと

「私はリア充になりましたああああああああい！」

「…は？」

「普通の高校生みたく彼氏作ったり、放課後にファストフード店に寄り道したり、ボウリングとかカラオケ行ったり…。そんなことがしてみたいっ！」

「でも！私は…」

私は墮天使ヨハネだからっ！」

「私が私でも良いって言ってくれたあのリトルデーモン達と一緒に。一緒にAqoursとして頑張りますっ！」

そう宣言する彼女はやっぱり輝いていて。

「おう。そうか。」

こんなありきたりな返事しか出来ない自分が嫌になりつつも。この子がせつかく見つけることの出来た居場所を守るために。全力で応援してやろうと思った。

Aqours6人目加入。

そして話は大きく動く…たぶん。次回予告を見る限り…たぶん。

「あ、あの！…一昨日はそれとなくA q o u r s…というか千歌さんをけしかけてくれてありがとう。」

「んん？何の話だかさっぱりだな。」

「…だっ、だから貴方もリトルデーモンにならない？」

「俺も嫌なことは嫌って言う性格なもんでな。遠慮しとくわ。」

「そ、そう…。い、いつか必ず振り向かせてやるんだから！」

「？お、おう。期待して待つとくわ。」

【幕間】善子とヨハネ

『私のリトルデーモンにならない？』

それは私の勇気を振り絞っての言葉だったのに……あの朴念仁は……！

「なにが『遠慮する！』よ！かっこつけちゃって——……ちよつとかっこよかつたじゃないのよ！」

私こと津島善子は自室のベッドの上で悶え、苦しんでいた。側には半開きの段ボールと、その中から溢れる真っ黒な布。それを横目にベッドの上をごろごろごろごろ。

この疼きは残念ながらいつもの闇の世界からの刺客のせいじゃないことは分かっている。いや、いつも刺客から狙われている訳ではないんだけど。

…友人の兄とは…なんともまあ普通のお相手じゃないかとも思う。普通を嫌った私らしくないとも思う。

でもしようがないじゃない。幼稚園の頃から一番長く見てきた異性なんだから。

幼稚園のとき、私にはほぼ毎日遊んでいた相手がいた。

その子の名前は国木田花丸。すこし小柄で、マイペースで、いつつもワンテンポ皆から遅れていたから誰かが側にいてあげないと駄目なほっとけない友達。

幼稚園にいる間は私が甲斐甲斐しく世話を焼いていたものよ……。あの子は三月生まれつてこともあつて発育が遅かつたし。

そして私達は幼稚園が終わつてからもよく一緒にいた。私のママは別に働いてた訳じゃないけど、最初あの子が公園で一緒に遊ぼうつて誘つてきて…、結局は日課みたいになつてたわ。

「よしこちゃん。つきは、すなあそびがいいぞら！」

「しようがないわね。きょうはなにつくる？」

「おしろー！」

「……じゃあまずいしがきからつくりましょ。」

「ぞらー！」

実はそこにいたのは私達二人だけではなかったの。親が5歳の子供を二人で置いていくわけ無いじゃない？

小学生のお兄さん。今考えると2歳差つて小さな差だけど、その時は私から見ればとても頼もしく見えたとわ。

「ほら。スコップ借りてきたぞ。」

そう言つて三人分のスコップを持つてきてくれたのは国木田徳丸くん。花丸のお兄ちゃん、私にとつてもお兄ちゃんみたいな人だった。

「ありがとう（ずら）！」

運動ができて、友達がたくさんいて、私達にも優しくしてくれて。

…あの男はその時からモテモテだったのではないだろうか。

そして私達はある約束をする。

「天使!? かっこいいね! じゃあ飛べるようになるんだ!」

そう言つて滑り台の下から見上げている少年と

「あ、徳くん…。 そうなの! 飛べるようになったら徳くんにも見せてあげるね!」
滑り台の上から話す、いつか飛べると信じている少女。

「本当? じゃあ約束しよう!」

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます。指切った!」

子供の他愛ない約束。数年後には、飛べるわけないと分かっていたけれど。

それでも私の心に残り続けたのは、たぶん彼がすごく輝いた目で私を見てくれたか

ら。

（私は今輝いているんだ…！）

幼いなりにそんなことを思った。

私達が小学校に入学したあたりから遊ぶ機会は少なくなっていた。

徳くんは部活に入ったし、私も小学校で新しい友達ができた。顔を合わせることはあったけど徳くんの周りにはいつもたくさんの人がいて、私には声を掛ける勇気なんてなかったの。周りの人たちが作る空間はあまりに明るくて。

人気者な徳くんと違って私は普通の子。だんだんと顔を見たらなんとなく避けるようになっていった。

私もあの輪に入れるくらい輝かなきゃっていつしか思ってた。

中学校に入る頃にはたぶん徳くんは私のことなんか覚えてなかったでしょうね。でも私は覚えていたわ。

…いえ、あの頃の私はただ”輝きたい”とだけ思ってたから…。もしかしたら彼のことなんて頭の中になかったかも知れないわね。

いろんなことに手を出しては失敗して。離れていく友達もいたけど、そばにいてくれた友達もいた。そんな人たちを他所に私は暴走してた。

そんな私の停止した頭に平手打ちを浴びせる出来事が起きたの。

「好きです！」

曲がり角を曲がろうとして聞こえたのはその一言。私はとつきにその角に隠れて様子を見かけたわ。

言葉を継げた後、手紙を渡して去って行く女子生徒と、手紙を持ったまま停止している男子生徒。

もちろん徳くんね。ちなみに女子生徒はどうやら徳くんの部活の後輩マネージャーだったみたい。後から聞いた話だけだ。

徳くんはしばらく手紙を受け取ったままの姿勢でいたけど、女子生徒が見えなくなつてから私が覗いている方をふりかえつた。

困惑した表情も含まれていたけれど、誰も見ていないと思つたのかその顔には照れた笑顔が輝いていて。

…とつさに逃げ出した。あの輝きを見ていられなくて。

そして思い出した、あの約束。

私はただ輝きたいんじゃないやなかった。徳くんに輝いた私を見せたかったんだ。つてね。なによ。輝きたいって。ただ徳くんに良い姿見せたいだけじゃないのよつて。

こんなかつこ悪い姿じゃ全然駄目じゃない。笑えたわ。

でもだからこそ吹っ切れた。今が底辺だぞ、ここから頑張るんだ、そう自分に言い聞かせた。

からの墮天（笑）よ！

なぜかそこから墮天しちゃったのよ！いろいろチャレンジした中で一番長続きしたことが一番の黒歴史よ！そのせいで高校に入って不登校になりかけて…泣

頑張つて登校したらなぜか徳くんが女子校にいて。ズラ丸に励まされて。

私のせいでAqoursが失敗しちゃって…。でも徳くんはそんな私の心情を読み取ってくれて。よっちゃんと呼んでくれて。

…Aqoursの皆と追いかけてこして私の個性を認めてもらった日にね。千歌さんから聞いたの。

「徳丸さんはね。千歌達にヨハネちゃんを追いかけてほしかったんだと思う。徳丸さんがヨハネちゃんに何か囁いてた時の顔がね。そう言ってたんだ。あんな真剣な表情の徳丸さん初めて見たもん。」

…それホントかしらね？信じてても良いのかしら。

津島善子を迎えてくれた暖かい居場所。いえ、津島ヨハネもひつくるめて迎え入れてくれたみんな。

そして私が善子であり、ヨハネである原因を作った男の子。

みんなまとめてリトルデーモンにすることは今は叶わなかったけれど、私はこの場所で輝いて見せる。

キラキラ輝いている徳くんの隣にたっても恥ずかしくないように。

だからそれまで待っててね？

違う、こんな結末は望んでいないっ（切実）

静かな部屋に流れるのは二階から聞こえてくるピアノの音。ピアノとか音楽の才能は無い俺にも分かる。これを弾いている人は技術もあるし、なにより気持ちもこもってるんだなあって。

俺はその音をBGMに、冷たいお茶を啜りながら談笑していた。

梨子ちゃんのお母様と。

…何でだよ……………。

時を遡ること3時間前。梨子ちゃんからラインでメッセージが来たことから今回の話は始まる。

「珍しいな。あの子と一対一で話したことは無かったような気がするけれど。」

メッセージを確認してみると

『新曲の作曲が出来上がりしました（*・O・*）

でも今みんな忙しくてちよつと出てこれないみたいなんです。千歌ちゃんもどこかに出かけてるみたいで…（TOT）

今回の曲はいろいろ新しいことに挑戦してみたので、今すぐにも誰かに聞いてほしいんです！（> <）

今お時間とれますか？』

…かわいいいな。かわいいけど誰だこれは。俺の知ってる梨子ちゃんじゃないぞ。

いや、ネットとかで人格が変わる人もいるし…。もしかしたら梨子ちゃんはこつちが本当の性格なのかも…。

つとそこじゃなくて。今すぐに曲を聴いてほしいか。別に筋トレしてるだけだし大丈夫だな。

『オツケーです（^ | ^） b

どこに向かえば良いかな？学校？』

『じゃあ私の家に来てください。千歌ちゃんちの隣です。』

『りよーかーい。また近くについたら連絡しまーす』

軽い気持ちで友達の家遊びに行くつもりでオツケーしちゃったけど大丈夫かな…。ま、梨子ちゃんも気にしてないみたいだし。俺が意識するだけ変か。

じゃあ早速準備して行こう。ピアノを弾いてる梨子ちゃんってなかなかレアだし。

とか思ってた時期が俺にもありました…。

ええと、千歌ちゃんの家がここで…。その隣だから…。お、あつた、『桜内』…ここだな。ちよつと緊張するけど…。よし、押しちやえ！

『ピーンポーン』

「はーい？どなた様ですかー？」

聞こえてきたのは梨子ちゃんではない、それでいてちよつと梨子ちゃんに似てる声。

この時点で後悔が始まりました徳丸です。

…いつから俺は梨子ちゃんと2人きりだと錯覚していた…？

彼女は「親が今日はいないので…」とか、「実は突然の台風で親の飛行機が飛べなくなつて…」とか言つたか? いや、そんな展開を希望したわけではないんだが。

案の定扉から顔を覗かせたのは梨子ちゃんのお母様と思われる女性。髪の色や身まとう雰囲気などからまず間違いないと思われる。

「あらあら。男の子? ええと、うちに(ご)用かしら?」

できれば今すぐ回れ右して逃げ出したかった。言つとけよ! 梨子ちゃん! 俺が来るつてこと!

「え、あ、あの。桜内梨子さんに用事があつて来たのですが、梨子ちゃ、さんは(ご)在宅でしようか?」

てててテンパつてしまつた汗

いやでもなんかこの人ただ者じゃないオーラが溢れているような気が…。

ん? ママライブ? なんぞそれ? なんか天の声が聞こえたぞ?

「あ、徳丸さん! 早かつたですね! どうぞ上がってください。」

と、梨子ママの放つオーラにあてられて活動停止していた俺に天使の声かけられた。いや、この状況を作り出した元凶か…。

「あら。梨子のお客さんなのね。ふふつ。男の子を家に連れてくるなんて小学生の頃でもなかつたのに。……………キープすべきかしら?」

なんか一瞬すごいことを言われた気がしたが聞こえなかった。俺には何も聞こえてないぞ。うん。

梨子ちゃんには普通に聞こえてなかったみたいで「私の部屋に案内しますね。」とか言われた。

……いや、てか、梨子ママオーラが……。いったい何者なんだ。

その後、梨子ちゃんの部屋に上がらせてもらった。なんかそこまで飾ってある訳ではないけれど、いかにも女子の部屋って感じの内装に、存在感を放つグランドピアノ。本を収納する機能性を第一に考えている、どっかの妹に見せてやりたい。

しかし机の上にはスクールアイドルの雑誌などが置いてあり、そういうのに興味が無かったと言っていた梨子ちゃんにも変化が訪れているのが分かる。

「それルビイちゃんから貸してもらったんです。私の部屋に置いてあるのがそんなに意外でしたか？」

「そういうわけじゃないんですけど……。いや、そうだね。正直意外だったわ。」

俺の視線に気がついたのかそう尋ねてきた梨子ちゃんに正直に返す。

「私自身も自分がこんなにスクールアイドルってものに魅せられるとは思っていません

でした。まさか自分がアイドルになるなんて夢にも見たことなかったですし。始めた最初の方も実はいろいろ不安でした。」

はにかみながら梨子ちゃんは続ける。

「でも今はすごく楽しくなつて来ちゃつて……。千歌ちゃんが言つてたことが当たつたみたいで悔しいんですけどね。毎日のダンスの練習も、こうして歌を作ることも、今では無いと何か足りないように感じちゃうんです。」

彼女はピアノに腰掛けながら最後には笑顔で言い切つた。

「私、スクールアイドルに……Aqoursになつてホントに良かったです！」

……ホントにAqoursのメンバーは良い笑顔をするから困る。

そのままの表情でピアノを弾き始める梨子ちゃん。

指が留まること無く流麗に動く様子はそれこそ女神のように美しくて。

「……………綺麗だ。」

「ふえっ!？」

そしてその言葉を聞いてしまった梨子ちゃんに「恥ずかしいから一階で聞いてください!!」と真つ赤な顔で追い出されて冒頭に戻る。そう。どんなにいい話を装つても再終着地点はすでに決まっていたのだ。

「今日はうちに来てくれてありがとうね。国木田くん。」

その美しい美声（大事なことなので2回言いました）で話しかけてくる梨子ちゃんママ。しかし似てるな…。梨子ちゃんも大人になったらこんな女性になるのか。

「あの子が家に男の子を連れてくるなんて初めてなの。中学校からずっと女子校だったから浮いた話も無かったし、ちよつと心配してたんだけど、大丈夫そうね。」

何がですか。

「い、いえ、僕たちはそんな関係じゃありませんよ？僕の妹の友達ってだけです。」

便利だな。『妹の友達』

「分かってるわよ。お隣の高海さん達と同じでしょ？」

「ご存じなんですか。」

「ええ。お隣の音は意外と聞こえてくるのよ。いつも賑やかで楽しそうね。」

俺はそんなに千歌ちゃんの家にお邪魔したことは無いのだが。そうか。いつもあんなに騒いでるのか。

と、梨子ママは手に持っていたお茶を置くと

「ありがとうね。梨子と仲良くしてくれて。」

頭を下げた。つてええ!?

「いいええっ!とんでもないですよ!梨子ちゃんはとても良い子ですよ!」

「それは分かっているわ。でもあんな普通の子といて楽しくなかったりしない?地味だし、おつちよこちよいだし。」

「そんなことないです。梨子ちゃんはA q o u r sに無くてはならない存在ですよ。作曲をほぼ一手に引き受けてもらってますし、時には暴走するメンバーのブレーキになってくれます。」

二階の音が途絶えたのも気づかずに俺は続ける。

「確かに少しドジなところもありますけど…。それも魅力の一つだと思いますよ。完璧な人間なんて付き合っただけ楽しいものではないです。それに梨子ちゃんが地味つていうんなら俺は世の大半の女性を地味と言いつけることができますよ。だからお母さん、自信を持ってください。あなたの娘さんと一緒にいて、僕はとても楽しいです。」

いかん。なんか嫁にもらうみたいな雰囲気になってしまった。

梨子ママはあつけにとられた表情をしていたが、なにかに気がついて表情を戻すと、「それじゃあ梨子を末永くよろしくね。」と言っていたはずらっぽく微笑んだ。

だからその言い方だと誤解を招くって…。あんだけ熱弁した手前「はい。」としか言えなかつたが。

「な」

「な？」

「何の話をしているんですか………！」

振り返ると顔を真っ赤にして母親に突っかかっていく梨子ちゃんの姿。え、まさか聞いてました？

『梨子ちゃんはA q o u r sに無くてはならない存在ですよ』あたりからだっけ？ 梨子。」

気づいてらしたんですか…。だからあんな言葉を選んで。ん？おれめちやくちや恥ずかしいこと言ったかも…？

その後梨子ちゃんをなだめすかすのに暫くかかり、いざ帰ろうとすると梨子ちゃんパ
パが帰ってきて一悶着あったりしたというのはまた別の話。

二次創作の作者達が総じて曜ちゃん好きすぎる件

疲れた…。

妹の友達のご両親との対峙はやっぱキツイよ。お父様はなんか下手な勘違いしだすし。もう懲り懲りだ。

いや、梨子ちゃんの曲を聞いたのは良かったけどね。

今はなんとか勘違いを解いて、ゆっくり妹の待つスイートマイホームへ帰っているところですよ。

お腹すいたなあ…。もう夜だよ。

今日の晩ご飯は何かなあ。オムライスが良いなあ。

などと考えて家路についていると、前の方から聞こえてくる聞き慣れた話し声。

「それでねえ、こんなポーズが良いと思うんだよね。」

「じゃあ、言葉に合わせながらポーズとってみる？」

「良いねー！」

スクールアイドルらしいことを言いながら前から歩いてくる二人組。

俺の前まで来ると

「デュアルオーロラウエーブ！」

「光の使者、キュアブラック！」

「光の使者、キュアホワイト！」

「ふたりはプリキ〇ア！」

「闇の力のしもべたちよ！」

「とつととおうちに帰りなさい！」

……………はぁ（溜息）。

「ちよちよちよつと！徳丸さん！そのまま通り過ぎようとしなくてくださいよ！」

「そうですよ！せっかく千歌ちゃんとアイコンタクトだけで打ち合わせして成功したの
にい〜！」

無駄にレベルたけえ。

「せっかくスクールアイドルらしいことをしてるって感心してたのに…。」

A qoursの精神年齢ガキンチョ二人組こと、千歌ちゃんと曜ちゃんだった。

「二人は今日も一緒だったのか。何してたの?」

「街まで行つて曜ちゃんと衣装の材料を買つてたんです。徳丸さんこそ、どうしてこつ

ちに?」

「ん。ちよつとな。梨子ちゃんに曲を聴いてほしいと言われて、お邪魔してた。」

やましいことはないんだけど一瞬濁してしまう。

千歌ちゃんはなんだそっかーぐらいの反応。だが曜ちゃんは顔を真っ赤にして

「ままままさか、ふふふふたりつきり!」

おーう。思春期の女子つぼーい。…いや、実際そうなのか。

俺の周りそんな色恋沙汰とか興味ない系女子ばっかだったからなく。マリーの距離感に馴れすぎたつてもあつてどうしても女子と近くなっちゃうんだよね。

「いや、お母さんもいらつしやつたよ。話してた時間はお母さんの方が長かつたくらいだし。なんなら最後お父さんにも会つたし。」

「おおおお義母さんとお義父さん…。もうご挨拶まで…。」

「もう曜ちゃんは考えすぎだよ。徳丸さんに限つてそんな間違いおこるわけないじゃ

ん。」

曜ちゃんの想像力逞し…おいこら千歌ちゃんなんて言った。

「あははは…いや、すいませんでした。」

「わかったならよろしい。」

なんか曜ちゃんの方があたふたしてて千歌ちゃんが落ち着いてるってのは新鮮だ。そう告げると

「曜ちゃんは恋愛話になるとこんななっちゃって。…耳年増？って言うのかな？」

幼なじみ相手にその表現はどうかと思う。

「曜ちゃん。戻ってきて。衣装作るんでしょ？」

千歌ちゃんが肩を揺らしてようやくと戻ってきた曜ちゃん。

「…はっ。ごめん。トリップしてた。」

意識を取り戻したようだ。

けど君がブツブツと「結納…ハメルーン…娘の名前…」とか言ってたのは忘れないよ

?ハメルーンって何よ。それを言うならハーマメルンだろ(それも違う)

「じゃ、じゃあこれで失礼しますね！」

慌てて両手いっぱい荷物を持って駆け出そうとする曜ちゃん。

それを見ていた千歌ちゃんが

「…ねえ曜ちゃん。明日の休日さ、徳丸さんに衣装作り手伝ってもらわない？二人じゃ大変だよ。衣装作れるって花丸ちゃんも言ってたじゃん。」

それまだ信じてたのか。

「俺は裁縫とか無理って言わなかったか？」

「ええ。でも毎回曜ちゃん大変なんだよ？私は自慢じゃないけど戦力にならないからね！」ホントに自慢じゃねえ。

曜ちゃんを見ると（手伝ってほしいけど迷惑かけたら悪いなあ…）みたいな顔をしてる。う・わ・め・づ・か・い！

いかん。俺の推しメンはまるなんだ！それに今日学んだじゃないか。家に行くところくなことにならないって！

「しょうがないなあ。俺もあんまり戦力にはならないよ？」

ってなわけで翌日。今日は曜ちゃんちでございます。

大丈夫。昨日と違って親はいないんだって。

…よく考えたら大丈夫じゃねえ。

「あの…千歌ちゃん先にお姉さんと予定入れてたみたいで…。午後からは必ず来るから午前中は二人でやっててほしいって。」

もう一回考えてもやっぱり大丈夫じゃねえ。

「ま、まあしょうがないな。後から千歌ちゃんにはたっぷり説教するとして、始めところか。」

作業開始。ミシンは曜ちゃんが使っているので俺は細かいところの手縫い担当。

しかし久しぶりに裁縫すると楽しいな。これは洋服作りが趣味になる気持ちも分かるかも。

カタカタカタカタ

カタカタカタ

カタカタ

カタ

曜ちゃんは今まで衣装ずつと一人で作ってたの？千歌ちゃんが頼りにならなさそうってのはなんとなく分かるけれど、他のメンバーもいたんじゃない？

「うーん。そうですね。確かに大変でしたけど、服作るのがとっても楽しいんですよー！」

私が作った服を着て千歌ちゃんが踊るんだとか、梨子ちゃんにこんな服を着せたら意外性があつて良いかもなとか。そんなことを想像しながら。

「Aqoursの衣装担当っていう立場も好きでしたし。梨子ちゃんが作曲して、私が作った服で、みんなで作詞して作った曲でパフォーマンスするんだー！って。最近は人数が増えたんでさすがに私一人では間に合わなくなってきましたけど。」

「でもそれでも、デザインは私でやっていますし。なんらかの役割が欲しかったんですよ

ね。」

役割？A q o u r s の中でってこと？

「はい。千歌ちゃんがせっつかく言い出したやりたいこと。私としても初めて千歌ちゃんと一緒にあって頑張れることだったので、何らかの訳に立ちたかつたんです。」

君は…なんというか…。

ホントに千歌ちゃんのことを好きなんだね。

「ふえっ!？」

……またふえっ!?!か。この後部屋から追い出される流れかな？

とか馬鹿なことを考えてたのだから…。

「そんなに分かりやすいですか…?」

ふえっ!?!え?どゆこと?

「わ、私が千歌ちゃんを好きだったってことです。バレちゃってたんですね…。」

ちよつと待ってそれはつまり?

「やつぱり女の子どうしって変ですか?女の子が女の子を好きになつちや駄目なんですか!?!」

え、ホントにそれ言ってるの?台詞を他の小説と間違ってるんじゃない?

「本気です！…徳丸さんもそんな反応するんだ…。ひどい…。」

え？いやごめんね。否定しているわけでは無いよ。びっくりしただけで。

「…ホントですか？私を変じやないと思いますか？」

もっろん！むしろ良いと思うよ！やっぱり

「百合って最高だよね！ってあれ？」

目を開けるとなぜか俺の顔をのぞき込む千歌ちゃんと曜ちゃん。二人ともこれ以上無いくらいのジト目をしている。

二人がどいたのを確認して起き上がる…起き上がる？あれ？俺は衣装作りをしていたのになんで寝てるんだろう（震え

半分ぐらい答えに辿り着いていたけれど、一応二人に聞いてみる。

「今何時ですっけ？」

「徳丸さんが寝てから3時間がたったところです。」

おっふ。

「ちなみに衣装は全部完成しましたし、徳丸さんの寝言はぼつちり録音して花丸ちゃんに送つとききました。」

おっふ。ふと窓を見ると夕方になってた。

確か最後の記憶が、千歌ちゃんが到着したI時半くらいで…。飯食つて眠くなつてたのもあつて。

「すいませんでした。」

完全に俺の落ち度だった。手伝いに来たのに寝るとか何様だよ…。もう良い子は帰る時間だよ…。

「はあ…。まあ良いですよ。徳丸さんが手伝ってくれたおかげで一日で全員分終わらせられましたし。千歌の十倍は働いてくれましたし。」

「ええ？曜ちゃんは甘すぎるよ。もっと、こうガツンと言ってやらないと〜！」

「千歌は人のこと全く言えないでしょ…。とにかく今日はありがとうございました。」

「いやいや、大半は曜ちゃんがやってってくれてたし。今回で曜ちゃんの負担がかなりおつきいんだつてことに気づいたよ。次もまた手伝いに来るね。」

「はい！その時はよろしくお願いします！」

次は寝ないでくださいね！そう言いながら敬礼して、見送つてくれた曜ちゃんと元気

に手を振る千歌ちゃん。

やっぱりお似合いだなあ。と思いました。

「ただいま。うおつ、まるじゃん。玄関で何してんだ？」

「『やっぱり百合って最高だよな！』この百合がお花なのかそれ以外の意味を持つのか説明して欲しいぞら。」

「いや、それは寝言でですね？」「正座。」…はい。」

「あと、連日まるの友達の家でまるの友達と二人つきりになることについてのお話もあるから覚悟するぞら。」

実は作者は妹系の作品が苦手だったりします。

A q o u r s が 6 人 となつてからも、彼女たちは以前と変わらず毎日一生懸命活動していた。

俺も俺で、自分の用事が無いときはちよくちよく顔を出すようにしている。

べ、別に毎日暇つて思われたくないから、週に2、3回しか顔を出さないわけじゃないんだからねっ。

今日は学校の委員会の仕事があつたから、浦の星に行くことができなかった。

そんな時でも、夕飯やその後などで、まるが今日あつたことなどを話してくれる。

「でね、今日は練習の他にも、どうやったらもつと内浦を知ってもらえるか」についての話し合いをしたんだ。」

飯食つて風呂入つた後の俺の部屋。宿題でわからないところを聞いてきたついでに、まるは今日のA q o u r s の様子を教えてくれた。

ちなみにだが、風呂上がりである。もう一度言う。風呂上がりである。

もう一つちなみにだが、まるはA q o u r s で一番背が小さい割に一番大きい、もとい大きい。

知恵袋で「風呂上がりの妹の色気がヤバいんですがどうしたら良いですか」っていう質問に共感できてしまうくらい、風呂上がりのまるは客観的に見て魅力的だと思う。

でもよかったな！お兄ちゃんも妹のおっ〇いには欲情しないんだよ。大人だからな

！

「なんか凄いわなことを考えてない？」

「いやいや、ちゃんと聞いてるよ？それでどんな意見が出たんだ？」

ジト目のまるに平然と嘘をついて、話をすすめる。

疑わしそうな表情で話してくれた情報によると、AqoursでPVを撮影することになったとのこと。

そうすれば、Aqoursと一緒に内浦も知ってもらえて一石二鳥なんだと。

「徳兄い、明日は来れる？」

「ああ。急な用事とか無い限りは今のところは大丈夫だ。何でだ？」

「そのPVの撮影を頼もうと思つて。カメラは曜ちゃんが準備してくれるつて言つてたから、カメラマンをするだけで良いんだけど。」

ふむ。それくらいなら良いか。というか、明日みんながPV撮影をするんなら俺がやることつてそれくらいしかないからなあ。

「じゃあ、よろしく！また明日ね。おやすみ。」ぶるん。

…まるが元気に立ち上がったときに…ぶるん…。お、お兄ちゃんは妹の（以下略）

そして翌日。浦の星女学院の屋上には頭を抱える俺の姿があった。

「廃校のことを先に言えよバカ妹…。」

昨日まるに頼まれてPVの撮影に来た俺は、千歌ちゃんからなんで撮影をすることになったかの説明を改めて受けていた。

そこで出たのは浦の星が沼津の学校と統廃合するという話。

昨日まるは一言も言っていなかった気がするんだが…？

「あ、あはははは。だって放課後に本屋に行けるようになるんだし、悪いことでもないかなあと思っちゃって。」

しかも聞いた話では千歌ちゃんも喜んだとか。μ☒sとおんなじだし、みたいな。

…これは一度本格的にμ☒sについて調べたが良いかも…。千歌ちゃんに限れば微妙に悪影響を与えている気がする…。

「…はあ。まあ良いけど。俺の通っている学校じゃないんだし。お前らは廃校阻止のため

めに動くってことで良いんだな？」

廃校と聞いて一瞬思い出したのは、今この学校で理事長をしている元同級生。あとで話を聞いところ。

「はい！今日はカメラマンよろしくお願ひします！」

そう言つて渡されたビデオカメラ。なんか高級そうだけど…。大事に扱おう。

さて、暑いけど頑張りますか！

「よし、じゃあまずはどこに行く？」

「ええ？どこって……と、とりあえず海！」

千歌ちゃん…。考えてなかったな…。そこまで俺が考えないといけないのか…。

とりあえず海ではなく学校を紹介することにした。

「君たちはスクールアイドルなんだから、通っている学校を紹介しなくちゃ駄目だろう。

そうだなあ、トップバッターはルビィちゃんにしようか。どこか良いところあるかい

？」

「びぎい！」

カメラを向けただけでどこかへ隠れてしまった。最近馴れてもらったと思つてたの

に……。へ、へこむ。

「あ、いえ、と、徳丸さんのことは大丈夫なんですけど……。カメラは恥ずかしくて……。」「うーん……。でも、これからアイドルやっていくわけでしょう？ だったら今すぐには言わないけれど、カメラにも馴れていかなきゃね。」

「うう……。じゃ、じゃあ、後ろ向いてるんで！ そ、それで許してくれませんか？。」「後ろ向いてるってそれじゃだm……。良いよ！ そんな目で見られたらお兄ちゃん何でも許しちゃう！」

その後、ルビイちゃんの撮影はいつも練習してる場所ってことで屋上で行われた。

もし、他の生徒の目につくような場所を選んだ場合、顔を真っ赤にして震えている女生徒を背後から撮影する男子生徒という光景が様々な人の目に映ったことだろう。あのシスコン姉に見られていた場合、俺が制裁を受ける気がする。

ってかホントに後ろ向きで撮っちゃったよ。大丈夫かな。

「さて、次はどうする？ おすすめの場所がある人から撮っていいこうか。」

とは言うものの、一年生組は入学してまだ日も浅いため思いつかないし、梨子ちゃんも転校生だったし。

頼りになるのは二人しかいないんだけど。

「おすすめ？ 曜ちゃん、どっかあるかな？」

「そうだなあ…。 やっぱり海じゃない？」

…もう学内には無いそうです。「はあ。 もう良いよ。 海行こっか。」

「わーい!!」

まるで図書館が…。 と言っていたので、図書館の紹介をまるでやらせ、それを撮ってから学校を出た。

あとは原作通りなのでダイジェストでお送りします。

@海岸

「富士山は結局静岡なの？ 東京では山梨って言う人もいたんだけど。」

梨子ちゃんのこの発言に残りの6人で全力で反論したり。

(どうでもいいけどカルデラが潰れてなければ阿蘇山が日本一だったという説がある。

熊本は良いところだぞ)

@峠越え

「この峠を」 自転車で来れる距離」とは言わないよねえ…ぜえ…ぜえ…。」

「曜ちゃん意外とスタミナは無いのな。 飛び込みだからそりやそうか。」

((このスペックの化物め))

@天界

「ふふふ。今から儀式を始めるわ。リトルデーモンを生け贄に墮天使イザークを召還
！」

「おいやめろ俺を犠牲にするな。というか、俺はまだリトルデーモンになってないぞ。
(ま、まだ!?!まだって言った!いつかはなっってくれるのかしら。やったわ!)

「?よっちゃんなに喜んでんだ?」「ななななんでもないわ!」
ごっ。

「?まるは何でにらんでんだ?」「なんでもないすら。」

@理事長室

「これじゃ我が校を紹介するものとしては認められないわ。」

さてさて。そんなこんなでPVを完成させた俺たちはこれをネットにアップロード
して良いかどうか、理事長に聞きに来ていた。が。

「どうしてですか!あんなに頑張ったのに!」

「努力と結果は比例しないのよ。大体なんで徳丸がいるのにこんな出来なのよ。」

こんな出来呼ばわりされた千歌ちゃん達は納得いかないようだったが、そりゃあれじゃ駄目だろう。沼津の都会を内浦と言つて紹介するのは普通にアウトだ。

「わりいわりい。ちよつと楽しくなっちゃった。」

「まったたく…。」

溜息をつきながら頭を押さえるマリィ。意外とちちゃんと理事長職しているようだった。

「まあまあ。またちちゃんと考えて、次はまともなの作ってくるからさ。今日のところはこれくらいで。」

「…そうね。期待してるわ。」

マリィに挨拶して出て行くみんな。俺だけを残して。最後の梨子ちゃんが出て行ったのを確認して、と。

「トック―?どうしたの?」

急に明るくなつて話しかけてくるマリィ。どうやら理事長モードはいったんお休みらしい。

「ん。ちよつと聞きたいことがあつてな。もう少し時間大丈夫か?」

「ちよつと待つてね…オツケーよ!しばらくはここでの事務仕事だから、話すだけなら

ノープロブレム！」

「忙しいのにわりいな。すぐ本題に入るぞ。……浦の星女学院の統廃合はお前も賛成してるのか？俺が気になってんのはこれだけだ。」

「…。」

とたんに真面目な顔になるマリー。いろいろ言いたいことを考えているようなのでしばらく黙っておく。

「…そうね。私が理事長になった途端のこの話だもんね。もしかしたら私のせいで、なんて考える子も出てくるかもしれないわ。」

「でも、さっきのトツクーの質問に対する答えはNOよ。私はこの学校がなくなるなんて絶対に嫌。トツクーも知ってるでしょ？私がこの学園の一年生だった時に何をしてたか。あんなのこの学校が好きじゃないとやっていないわ。」

もちろん知っている。だから聞いたんだ。

マリーとは高校に入った後もちよくちよく連絡をとっていた。その時に、彼女が同級の松浦果南、黒澤ダイヤとともにスクールアイドルを始めたことも聞いていた。一応

二人とも会ったこともあるし、踊りを見せてもらったこともある。これはまる達には内緒にしてるがな。

その後しばらくしたら、マリィが家の都合で内浦を出て行くって急に言われて。見送りもあたふたしてる間に終わっちゃって。

3人にながあつたかは知らない。マリィが出て行ったことと、それが関係しているのかも知らない。でも。

「ああ。お前はあの時の笑顔が一番輝いていたよ。中学では見たことない楽しそうな笑顔だった。嫉妬したぜまったく。」

「ええ。とつても楽しかったわ。でもトツクーとの時間も同じくらい私にとつては大切なものよ?」

「ありがとうよ。じゃあマリィは学校にはなくなつて欲しくないんだよね?」

「もちろん。そのためにできることはなんでもやるわ。」

よし。その確認ができたなら。

「なくさせねえよ。」「え?」「この学校の廃校を阻止してやるっていうことだ。」

「今まで、俺は妹に頼まれたから A q o u r s の練習に来てた。踊りを覚えて欲しい。それを自分に教えて欲しいっていう頼みでな。なし崩し的に A q o u r s の雑用みたいなポジションについてちゃったが、まあそこまで深く関わっていくつもりはなかった。」
「だけどな。妹と同じくらい大切な、マリーの手伝いになるんだったら、全力で A q o u r s をサポートしてやる。他にも手伝えることはなんだってやるよ。」

「だからもう一言だけ言ってくれねえか？俺に頑張るための理由をくれ。」

我ながらかっこつけすぎだと思う。でもさっきの理事長モードのとき、マリーは少し表情が暗かった。たぶんたまっている事務仕事も廃校関係のものが多いのだろう。

マリーには笑顔でいてもらいたい。なんでだろう。いきなりそんな思いがよぎったんだ。…これもかっこつけすぎだな。

「…なんで？トツクーには関係の無い話よ？」

震える声で尋ねてきたマリー。俺か？顔を曇らせている原因は俺なのか？笑顔でいてもらいたいとか言ってた俺なのか？

「おいおい。関係ないとか言うなよ」。泣いちゃうぞー。…真面目な話、A q o u r s のメンバーもこの学校にはなくなって欲しくないと思ってるらしいし。あと、マリーを助けたいの恩返しかな？」

「恩返し？」

「恥ずかしいから詳しくは言わないけれど、案外俺はマリーに助けられてたんだよ。救ってもらってた。だからな。」

きよとんとしててる。まあ実際そう考えてるのは俺の気持ちの問題だから、覚えがないんだらうけど。

詳しくは過去話をそのうち挟むからその時にならう。

マリーはしばらくうつつむいていた。マリーにはマリーなりのビジョンがあるのだから、俺やA q o u r sのみんながやることは出しやばりかも知れない。でも分かかって欲しいんだよなあ。

顔を上げたとき彼女の表情は。

「トックー。助けてちょうだいーこの学校を残す手伝いをして欲しいのー！」
目に涙を浮かべながらも花のような笑顔が咲いていて。

「任せられた。」

全力でやってやろう。こっからのおれの原動力だ。

「あ、マリー。お前A q o u r s入れ。」

【幕間】 マリーゴールドの咲く頃に

私が浦の星女学院から転校する前日。

「なあ。マリー。転校するって本当か？」

「ええ……。家の都合だね。伝えるのが遅くなってごめんなさい。」

目の前の男の子は一瞬悲しそうに目を伏せたけれど、すぐに顔を上げて

「まあ今生の別れってわけじゃねえしな！ちゃんと連絡しろよ！」

そう言つて笑顔で送り出してくれた。

転校自体はそんなに悲しいことではなかったけど、この笑顔が見れなくなるのは少し寂しいわね。

私も笑顔を頑張つて作りながら、この明るい男の子と出会った日のことを思い出して

今でこそ親友と言っても過言ではない仲だけれど、私とトックーは最初から意気投合したわけではないわ。

最初に同じクラスになったのは中学2年生の時。国木田っていう初めて聞いた名字だったから最初の自己紹介から印象に残ってた。

彼は野球部に所属していて、運動もできて面白い、いわゆる人気者ポジションだった。たぶんそれは今でも変わらないけど。

その頃の私はみんなが想像しているように日本語が苦手で、話せる人もいなかった……そんな外国人キャラじゃなかったわよ？

ちゃんと話そうと思えば話せるわ。今と同じで、カタコトになる時なんて9割わぎとよ。

…あれ？みんな分かってたわよね？アレ、わぎとよ？

お互い友達が多い方だったけど、なんでか話す機会が少なくて、しばらくはただのクラスメイトって言う認識だった。

事件が起きたのは夏休みが明けて2学期が始まった頃。

その頃、私達のクラスでMONOが紛失する事件が起きたの。あ、間違えた。物が、
ね。

無くなったのは消しゴムだったり、教科書だったり、中にはリコーダーを無くした子もいるわ。あ、男の子のリコーダーだから多分そう言う目的じゃないと思うんだけど。

そして上の文から分かると思うんだけど、物を紛失したのは一人じゃなくてクラスのみんな。みんなが何か一つずつ無くしていた。

面白いでしょ!?興味深いでしょ!? interestingでしょ!?

でもこの小説は恋愛コメディであって、ミステリーじゃないから事件については適当に要点だけね。

クラスでは担任の先生が主体になってHRで犯人捜しを始めた。

まあ犯人はトックーだったんだけど。

…え？いきなりすぎる？

しようがないじゃない。だってこの小説は（r y

まあ敢えて推理するとしたら、このエピソードが私とトツクーとの仲良くなつたきつかけつてことから、私かトツクーは事件に関わつてるんだらうなくぐらい？

あとは二択ね。コインで決めようかしら。

そうだった。仲良くなつたきつかけを話してるんだつたわね！

いや…ごめんね…。このエピソード自体にそんなに意味は無いのよ…。

実は仲良くなつたつていうか、私が彼のことを気に入つたのは事件を引き起こした動機でね…。

「身体測定のための体操服を忘れた。バレたら怒られると思って自分の体操服も怪盗Xに盗まれたことにしようと思った。」

ぷはあ w w w w w w w w w w w w w w w w

怪盗X w w w w w w w w w w w w w w w w

ちよつと待つて怪盗Xどこから出没したの!?

もしかしてアレ? 怪盗は神出鬼没つてヤツ!?

そんな感じで思ったのよ。あ、コイツは人気者とか以前にただのバカなんだなって。

こんな面白い人を何故今まで見逃していたんだ…つてね。

そんなこんなで(上の2段落の書き出しがホントに”そんなこんな”でマジでびつくりしたのは書き終えてからです。)いろいろ話すようになったの。

トック―は本当に f u n n y な人でね。みんなからの人気の理由がよく分かったわ。

男子にしては気配りができるし、空気も読める。背は私より小さかったけれど、足も

速いし運動もできるし。

なにより面白いし。存在が。

人気の理由は分かっていった。そりやモテるわよね。

でも一つだけ分からなくなっていた。

こんなにいい人が、何であんなに頭の悪い事件を引き起こしたんだろう？

どうしてもその怪盗Xのイメージと、仲良くなつて中身を知っていたトックーとのイメージがマッチしなかった。

でも本人に聞いても「事実だよ？」としか言わないのよね。

だから事件が起こったときにトックーと仲良かった人たちに聞いたのよ。

そしたら、やっぱり事実じゃなくてね。

「徳丸はバレてないと思ってるんだけど、実はアレは別の人のために引き起こしたんだ。」

「なんか、ホントのいじめがあつて上靴を隠されてた人がいたらしくてな。」

「そのいじめをされていた本人。まあK君なんだけど、K君が気づく前にその主犯グループが実行してるところを徳丸が目撃しちゃって。」

「なんとかK君が悲しまないように配慮した結果がアレなんだよ。」

「そいで事件が発覚してみんなが騒いでる間に主犯格呼び出して上靴取り返してな。」

「あれは同性の俺から見てもかっこよかったわ。」

「なんで俺が知ってるのかって？そりゃあ四六時中徳丸のことを見てるからに決まってるじゃないか。」

最後の一言でその人は私の中で要注意人物になったけれど、まあ教えてくれた情報はホントみたいで。

もうその頃にはトツクーは今と変わらない親友ポジションにいたんだけど、更に好感度跳ね上がったわね。

このことはクラスの大抵のみんなが知ってるみたいで、本人だけ隠せてると思ってるようだった。

やっぱいい人よ。トツクーは。

中学校の間はたくさん一緒に遊んだわ。まあ私も自由奔放に生きてたから、トツクーと一緒にやんちゃしたりすることはとつても楽しかった。

本人は「マリーのせいで大変だよ。なんで俺がブレイキ役やらなきやなんだ。」とか言ってたけど、私からしてみればあなたも楽しんでたでしょ？つて感じ。

中3になつても同じクラスになつた私達は様々な学校行事や受験勉強なども一緒に頑張った。

私は浦の星女学院が第一志望校だったから高校はたぶん別々になるんだろぅな〜と思つてたけど、トツクーは「じゃあ俺も浦の星に行こうかな。」とか言つていた。たぶん冗談だったと思う：思いたい。

トツクーは少なくとも勉強ができる方じやなかったから、ほとんど私が教えるかたちだったけれど、勉強会なんかもしたわね。

そして無事にお互い志望校に合格。4月から別々の高校になつた。

まあそこからはご存じのように私がスクールアイドルを始めたり、ちよつといろいろあつて転校したり。

ラインとかで連絡はとっていたけど、顔を合わせたのは私が引越す日が最後で、二年経って浦の星の屋上で再会したの。

最初見たときは誰か分からなかったけれどね！

2年経ってもトツクーはいい人だった。

私が廃校のことで悩んでるってすぐ見抜いて。

力になってくれると約束してくれた。

大切な…マリーのため…ね。

嬉しいことを言ってくれるわね。

おかげでなんだか胸の奥がぼかぼかしてきて、これからも頑張ろうって思えるわ。
ふふっ。何ででしょうね？

私も彼のことを大切に思っているからかしら？
大事な大事な…親友なんでもんね。

「あ、マリィ。お前A q o u r s入れ。」
ふえっ!?

【幕間】中学生日記

4月8日

中学2年生になった。

クラス替えがあつて、また新たな知り合いが増えそう。

金髪美少女がいてビビった。

5月27日

クラスの文化祭の出し物をHRで決めたのだが、小原さんが執事&メイドカフェがしたいと提案し、結局それになった。

別にそれは、クラスの女子のメイド服を見られるし良いと思つたのだが、なぜか俺だけメイド服らしい。

小原さんのせいじゃないんだけど…解せぬ。

6月10日

文化祭は無事成功した。

メイド服、というかスカートの防御力の低さに驚愕した。

風が吹けば見えちゃう(照)

7月1日

野球部中体連。先輩方の最後の試合。

残念ながら勝てなかったけど、この一年間本当に楽しかった。ありがとうございました。

…え？俺がキャプテンなの？

8月13日

暑い。暑い暑い暑い暑い暑い暑い。

地球温暖化のせいだか妖怪のせいだか知らないけど、外の部活にはきつい。

部活帰りに小原さんに会って、「今日は国木田くん泥まみれだからハグはやめとくね。」と言われた。

いや、いつもしてねえだろ！多大なる勘違いをチームメイトから受けたわ！

9月7日

同じクラスのヤツらがKの上靴を隠してるのを目撃。その時「返せよ。」と言えば良かったのだが勇気が出なかった。

そのあと2時間くらいずっと葛藤していたが、覚悟が決まったので計画を実行。ちゃんと主犯格から返してもらえた。

いじめとかを見て、部外者が動くって凄い大変なことだと思った。

9月10日

【悲報】いじめのターゲットが俺に移った模様。

なお、たぶんこっちの勢力の方が強いのでやり返そうと思えばぎったぎたにできることのこと。

まあやらないけど。

10月3日

いい加減あいつら鬱陶しい。

別にお前らに無視されても、話してくれるヤツの方が圧倒的に多いから全く気にならない。

クラスの雰囲気が悪くなるからやめろ。

10月4日

最近小原さんがめっちゃ絡んでくる。

最初はいじめグループに関わりがあるのかと思ったけど、たぶんこの人そんなこと一切考えてないっぽい。

「見て見てトック―！コアラのマーチが大玉になったわ！」みたいな人が悪い人であろうものか、いやそんなことないと思う。

10月30日

物を隠されたりすることでもちよつとずつイライラが溜まってきたが

「トツクー！今日の髪型可愛くない？テレビで見たんだけど、今流行ってるんだって！」
「多分その髪が流行ってるのってオシャレ魔女ラブ&ベリーの世界だけだと思うぞ……？」
「なんでトツクーが知ってるのよ？」「秘密。」

そんなバカなやりとりをしてたら、怒りなんてどつかいっっちゃうんだよな。不思議だ。

11月3日

せつかくの祝日だというのに、小原さんに引きずられて釣りへ。

父親のクルーザーを出してもらったらしい。どんだけだよ。

釣りは俺ばかりが引き当てる、小原さんは拗ねてた。周りに何も無い海上で、久しぶりに思いっきり笑えた。ありがとう。

11月7日

なんか嫌がらせが収まってきた気がする。

いくらやっても気にしないように見える俺の態度に飽きたらしい。

多分それは小原さんが一緒にいてくれたからだと思う。この2ヶ月ほど精神的にはホントに参っていたから。ありがとう。

12月24日

終業式の後、クラスの数人で小原さんの実家に呼ばれてパーティーをした。

いや実家。でけえよ。ホテルじゃねえか。

楽しいクリスマススワイブだった。

家に帰るとまるが「サンタさん来るかなあ？良い子にしてただけど、この前お皿割っちゃったからなあ…。大丈夫かなあ…。」と泣きそうな顔で聞いてきた。お前今いくつだ。

1月1日

夕べ大晦日恒例のバラエティ番組や、Twitterを見てたら遅くなつて昼過ぎまで寝てた。

小原さんから電話で呼び出されて近所の神社に初詣へ。

今年も明けましておめでとう。

あと、俺の実家寺なんだけど、神社に来て大丈夫かなあと言ったら、小原さんに馬鹿を見る目で見られた。なんで？寺と神社ってライバルなんじゃないの？

2月14日

特記事項はありません。

3月29日

やっと14歳になれた。学年で一番誕生日遅いんだよね。

春休みだから、部活のみんなには祝ってもらえたけれど他は忘れてるだろうなあ。と思つてたら意外とメールやラインなどで言ってもらえた。

小原さんからはなまはげの写真が送られてきた。謎すぎるわ！

4月7日

学年がまた一つ上がった。

クラスはまた小原さんと一緒だった。

自己紹介でマリーって呼んでね！とか言つてたから、マリーって呼んだら逃げていった。なぜ逃げる。

6月30日

部活が終わった。

こんな頼りないキャプテンについてきてくれたみんなありがとう。

これからは受験に向けて頑張るぞ！

7月1日

スプラトーン超楽しい。

8月9日

夏期講習が休みの日だったからゆっくりしようと思つたのだが、マリーに誘われて勉強会。

意外とマリーは勉強ができる。教えてもらった。悔しいけど。

分かりやすくコツをこつこつと教えてくれる。(日記だからツツコんでくれる人がいない…)

9月5日

休み明けの実力テストが返ってきたのだが、成績が急に伸びてた。

夏期講習とマリーの勉強会のおかげだな。

マリーの志望校を聞いたら浦の星だと言っていた。俺もそこにしようかな。

ここから年明けまでひたすら勉強している

1月1日

俺は神には祈らねえとか言ってたけど、神頼みしてきた。

ついでにマリーの分も。

2月12日

前期試験の発表があった。

落ちた。

マジかよ…。ちよつとへこむけど、でも思ったほどダメージはない。

受かってたマリーもこれから勉強を見てくれるって言ってくれたし、後期に向けて頑張ろう。

3月8日

受かった！

俺よりマリーが先に番号見つけて泣いていた。いや泣くなよ。落ちたのかと思ったわ。

春から違う高校だけど、コイツとはちよくちよく会いたいと思った。

3月29日

15歳になりました。

マリーが浦の星女学院の制服を披露しに来た。似合ってると思うぞ？そう言ったら「至ってノーマルで面白くない。」と言われた。

仕返しに背中についてるタグのことは教えないでおいた。

「こら！まる！人の日記を勝手に読むな！」

「机の上に置きっぱなしだったから……ごめんなさい。」

「……俺なんか恥ずかしいこと書いてたか？」

「いや……特には無かったと思うけど。まるのことを意外と心の中でデイスってたのが分かったすら。」

「それは愛情の裏返しだからありがたく受け取っとけ。」
「むう。」

日記の裏表紙に書いてあるプロフィール（何度も書き直して現在のデータになっている）

名前：国木田徳丸

年齢：17歳

誕生日：3月29日

身長：179センチ

体重：乙女の秘密

好きな食べ物：卵料理。甘い物。特にオムライスとプリン。

得意なスポーツ：野球。水泳。陸上もそこそこ早い。

座右の銘：Heaven helps those who help them
s e l v e s (天は自ら助くる者を助く)

ずらも良いけど関西弁も良いよね

マリーとの話を終えて理事長室を出る。あいつらが凹んでないと良いんだけど。と、昇降口ですぐに発見できた。

「なんだ？意外と凹んでなさそうだな。新しいアイディアでも見つけたのか？」

「あ！徳丸さん！」

千歌ちゃんがこちらを振り返ると、それにつられてみんな振り返った。

誰一人として暗い顔をしている人はいない。

「新しいアイディアって」内浦を紹介する” ってことですよ。それはまだなんですけど……。」

梨子ちゃんがかみながら言った。

「難しく考えずにありのままを紹介しようって決めたんです。」

周りのみんなもその意見に納得しているらしい。

…そうか。せっかく手伝えることは何でもしようとかいつらを慰めるところから始めようと思ったんだが。

どうやらこの子達はそんなにか弱くないみたいだ。

「今日はこれからどうするの？もう解散？」

「いえ！これから千歌ちゃんのおうちで作戦会議であります！」

曜ちゃんの元気な返事に思わず敬礼してしまう。

「そうか。気をつけてな。」

「徳くんは来ないの？」

「ああ。とりあえず今日は自分たちだけで頑張つて。行き詰まったらアドバイスはするよ。」

確かに俺は全面的にAqoursをサポートすると約束したが、それと”こいつらの道を1→10まで決めてやる” ってのは別だと考えている。

さつきマリーと話して決めたことだ。

以下回想。

「あ、マリー。お前Aqours入れ。」

そう告げたマリーは笑顔のまま固まった。

俺が誘った理由ってのはまあいろいろある。

一番は楽しそうだったあの頃の笑顔を見たいってところか？自分でもよく分からん。

「…びつくりした。サラツと言ってきたわね。」

「半分思いつきだからな。」

「おい。」

動き出したマリーは俺の申し出が意外だったようだ。まあ半分思いつきだからな！

「トックーのことだから残り半分はちゃんとした理由もあるんでしようけど…。今はまだやめておくわ。」

「…今はまだ？ってことはいつかは…。」

どこか影のある笑顔でマリーは続ける。

「私だけ先につてのはやっぱりね…。3人一緒にないと。」

微妙に小さい声だった。未だに引きずってるようだ。

うゝむ。1年生だったときの出来事が気になるが。

話してくれるまで待とうかな。

「そうか…。待つてるからな。あいつらも歓迎するから。」

「うん！もうちよつとだけ待っててね。」

その後、俺が頑張るといつても必要以上に干渉するなとも言われた。

「あの子たちが自ら考えていくことも必要でしょう？ そうじゃないとAqoursの色は出ないわ。」

Aqoursの色。それは個性という意味だろうか。

スクールアイドルをやっていたマリーだからその意見だろう。

やっぱりスクールアイドルに詳しいやつがいた方が良さそう。現状ウチにはルビィちゃんぐらいしか詳しい人がいない。千歌ちゃん？ 情熱は買うとだけ言つとこう。

「そうだな。あくまで主役はあの子たちだ。肝に銘じておくよ。」

二言三言話した後、俺は理事長室を後にした。

と、いうわけで昇降口であいつらと別れて数分後。

校門にて。

俺は。

警備員さんに捕まっていた。

「いや、だからこの学校の関係者なんですってば。」

「ならば許可証を持つているはずだろう。学外の生徒がこの学校に入るときには必要になるはずだ。」

きよ…許可証？そんなの持つてねえよ。

確かに今までここに入り出すときはA q o u r sのメンバーと一緒にだったから、普通にスルーしてくれてたのかもしれない。つてかこの警備員は初めてだなく。いつものおじいちゃんじゃないもんなく。

「不審者として通報しても良いんだぞ。」

「じゃあ理事長を呼んでください。説明してくれるはずですから。」

「理事長に連絡できる方法など知らん。代わりに生徒会長を呼んでやったぞ。」

…ぱーどうん？生徒会長って言った？

「いや、すみません。謝るからそのお方だけは勘弁してください。」

「なんでそんなに嫌がるんですか？ねえ。国木田徳丸さん。」

背後から俺を咎める声が聞こえた。

凜とした声でそれが誰だか分かってしまい、ちよつと背筋が…。

「ぞわっ。」

「口に出さないでくださいますか。」

仕方なく振り返ると、案の定そこにいたのはお呼ばれの生徒会長だった。

彼女は黒澤ダイヤ。

黒髪ロング、清楚なお嬢様系の生徒会長。口元のほくろが特徴的。

以上。外見の説明。

実際は生徒会長を務めながらも、割とポンコツ。シスコン。プライドが高い。

……との話をマリーから聞いた。シスコンの件はちよつと心当たりがあるわ。

「すいません守衛さん。この方は不審ではありますが関係者というのは誠に遺憾ながら

……事実なんです。」

「やけに溜めたな。今。」

「と、いうことで許可証は生徒会が与えます。ついてきてくださいますか？」

「ほーい。」

ふう。なんとか通報されずにすんだ。

「じゃあ行きましようか。」

校門から生徒会室へ移動してきました。

「はい。許可証です。今度から誰かと一緒だとしても一応見せてくださいね。」

「うい。ありがとう。さつきは助かったわ。」

もし彼女もマリーも来てくれなかった場合、千歌ちゃんの家からまるを呼び戻さないといけなかった。

「いえいえ、知り合いのよしみですわ。…最近ルビイもお世話になっているようですし。」

「う…知ってたか。」

「A q o u r sの手伝いでしょう？それを知らなかったら許可証なんて与えてませんわ。」

続けて彼女は言う。

「実はそのことでちよつとお話があるのです。」

…少し顔を歪ませながら。

「け、決してルビイちゃんに悪影響を及ぼしてはおりませんっ！」

「その話とは別件ですわ。それはまた次の機会に…。」

次の機会とかあんのかよ。

「…これに彼女たちが出る…ということ？」

相談として見せられたのはライブの紙。東京で行われるスクールアイドルのライブのようだ。

「そう言う話があるというだけです。まだ正式なお誘いは来てなくて、もうちよつと人が出たら…もしかしたら、という話です。」

おお。それって凄いいことなんじゃないか？

まだ結成して数週間のグループがライブに呼ばれるなんて。

でもじゃあなんで俺に話したんだ？

「それは良いことなんじゃ…？」

「…私は時期尚早だと思うだけです。彼女たちが出たいというなら止めません。ただもし。」

そこでいったん区切って。

「もし彼女たちが失敗したり、打ちのめされたときは助けてあげてください。」

「失敗はまだしも、打ちのめされるなんてそんな…。」

「起こりえます。」

黒澤さんは断言した。

まるで未来を知っているかのように。

まるで…まるで体験してきたかのように。

「だから…そのときはあの子たちをよろしくお願いします。」

そう言って頭を下げると、もう用はないというように自分の仕事を始めてしまった。

千歌ちゃんやまるの話聞く限り、スクールアイドルに否定的な考えを持つ人だということだった。

俺としてはマリーの件で元スクールアイドルだということは知っていたから、悪い人じゃないのは知っていたが。

彼女も彼女なりにAoursの行く末を案じてくれていることが分かった。

だったら協力しようと思えてくる。

「これが…リアルツンデレか…。」

「ツ、ツンデレじゃないんだからねっ。勘違いしないでよねっ。」

ノリも良いしな！

無事許可証ももらえて、何もなく家に帰った。

内浦や浦の星を紹介するPVを作るって話だが（覚えてたか？間に2話も番外編が入っちゃったからな）翌日の海開きの時に、千歌ちゃんが

「エウレカ！（訳：ひらめいた！）」

と叫びだし、ナイスアイデアを思いついたとの噂がある。

嘘か誠かの判断は各自に任せ「嘘に決まってるじゃないですかっ！もうっ！」…真相は闇の中である。

そうして完成したPVはネット上で大人気となり、黒澤さんが心配していたように、A q o u r s は東京でライブを行うことになった。

出発前日。

「ねえ徳兄い。明日のファッションこんな感じで良いかな？」

「…お前東京をなんだと思ってるんだ」

「魑魅魍魎が跋扈する迷宮ダンジョンという名の学園都市。」

「うん？…んん？なんかいろいろ作品が混じってねえか？」

網元のお屋敷。

「ねえお姉ちゃん。明日のファッションこんな感じで良いかな？」

「あなたは東京をなんだと思ってるんですの？」

「カラーギャングが抗争を続ける中、真っ黒なライダースーツを着たデユラハンがバイクで走っているところ。」

「大体それであってるけれど、そんなことを教えた犯人を教えなさい。罰を与えるから。」

「徳丸さん。」

「あいつかあ…！」

そんなやりとりがあつたとかなかつたとか。

同情するなら出番をくれby果南

「東京でライブ？」

「そうなんです！この前のPVがネット上で人気が出たみたいで、お誘いが来たんです。有名な人たちも来るそうで、その人たちも一緒に！」

Aquoursの練習に顔を出したら、いきなり千歌ちゃんが「プロデューサーさん！ライブですよライブ！」って駆け寄ってきた。俺はPじゃない。

しかし黒澤さん（姉）の言うとおりになったな。となると、約束した通り俺も動くべきなんだろうか。

「それは凄いいじゃん。それで？そのライブってのはいつなの？」
「今週末です！」

今週末……。スケジュール帳を開いて確認してみると、学校で模試が入っていることが分かった。いかん、スケジュール帳を開くまで模試があるという事実を忘れてたんだが。

ってかマジか。ついて行けなくね？

先日生徒会長と話したことを思い出す。

『彼女たちがもし失敗したり、打ちのめされることがあったら必ず助けになってあげてください。』

うん。必ずしもライブにくつついていく必要はないかな…？まあでもこの子たちのライブを見たことが無い身としては一緒に行きたいんだが。

「徳丸さん、どうですか？予定は空いてますか？」

梨子ちゃんが遠慮がちに尋ねてくる。

「…ちよつと厳しいかも。日曜日に学校で模試を受けることになってた。ずらせないかどうか聞いてみるけれど…。」

……………。

「…あ、徳くん受験生なのか。」

「今『この人何で模試とか受けてるんだろう？』って間があつたんだが。代表して罰を受けるのはよつちゃんが良いな？」

「い、いや、ごめ、いたたたたた！」

墮天使に頭グリグリをしながら見れば、他のメンバーも気まずそうに目をそらしている。まあ本人にもあんまし自覚がないし良いんだが。というか、年齢設定上こうなっちゃっただけで、この設定が生きるときはほとんど無いからなあ…。

「って言うかなんだ？梨子ちゃんは俺についてきて欲しかったのか？」

「なに勘違いしてるの？ 梨子ちゃんは荷物持ちが欲しかっただけずら。」

まるが間髪入れず訂正してきた。

…そうなのか。ははは、一瞬でも調子に乗った俺がバカだった。というかちよつとからかってやろうと思っただけなのに…。

「…生まれてきてすいません。」

「い、いや違いますよ！あと一人くらいA q o u r sの常識人枠が増えないと、東京でなにか問題が生じそうだなあって思ってただけです！」

梨子ちゃんズバツといくな。隣で常識人（笑）の千歌ちゃんが『そんなこと考えてたの!』みたいな顔して地味に傷ついているぞ。

「あぁごめん千歌ちゃん！別にあなたのことを言ったわけじゃないのよ！」

「…ホントに？」

「ホントにホント！」

「えへへ。じゃあ許してあげよう。」

そう言って笑顔に戻る千歌ちゃん。なんだこの茶番は。ほのぼのしたから許す。

「じゃ、じゃあ徳丸さんはライブ見に来れないんですか？」

うう…ルビィちゃん…。涙目で見ないでくれ。一瞬『サボっても良いか。』と思っ
まっした。

でも…そっか。一年生トリオにとっては初めてのお客さんがいるところでのライブになるんだ。

どうしよう。ものすんごくついていきたい。

「できるなら行きたいんだけどね…。まあギリギリまで先生と交渉してみるよ。だからひとまず君たちはライブを成功させることだけに集中しなよ。」

そう言うとしぶしぶながら皆準備体操を始めた。

さて。ちよつと生徒会長に報告してきますかね。

応援には行けそうにないことを話すと、机に座る黒澤さん（姉）は溜息をつきながら「模試ならしよがないですわ。その代わりできることはお願いしますよ。」
と言ってくれた。

「了解。俺にできることなら何でも言ってくれ。」

おちやらけて言う俺にあきれたような目を向ける黒澤さん（姉）。

だが、その心配そうな表情は隠しきれいなくて。

「そんなに…怖いのか？」

ビクツと。

体が震えたかと思うと、そのまま動かなくなる。

しばらく考え込んだかと思うと

「何を…何を知ってるんで…！いや…マリーさんから聞いたのですか。」

一瞬声を荒げたが、すぐにいつもの冷静な生徒会長に戻った。

「いや。何も聞いてねえよ。ただ、今の君はなんだかおびえているような気がするんだ。違う？」

互いの目を見つめて数秒。

観念したのか目をそらすと

「…違いますわ。」

とだけ呟いた。

そして再び沈黙。

…うん。そろそろ沈黙を表したりとか、シリアスな雰囲気合う語彙が無くなってきた

たから、切り上げようか。

「大丈夫だよ。」

唐突に。されど空気に溶けるような優しい声をかける。

「彼女たちは傷ついたり壁にぶつかったりしても、そこで折れることはないよ。」

「…なんで言いきれるんですの？あなたそんなに付き合いも長くないでしょう。」

「ん〜。なんとなく。でも付き合いの長さだったら黒澤さんも同じくらいでしょ？だつたらあの子たちが失敗するとも言いきれないと思うんだけど。」

そう言い返すと、黒澤さん（姉）はぼかんとした後微笑み、「そうですね。」と肩の力を抜いたようだった。

よしつ。極秘指令 ミツシヨウ　くダイヤではなくガラス細工を扱うように接しましょう。コンプリート！良かった事前に接し方をルビイちゃんに聞いたといて。

「あ、私のことは下の名前で呼んで頂いて良いですわよ。ルビイとこんがらがると、いち黒澤さん（姉）と書いて字数を稼いでいるのは見てて見苦しいですわ。」

地の文を読むな。

「わかったよ。ダイヤ様」

「何故みんな…『様』で呼ぶんですか…。」

さてさて。放課後を練習に費やし、迎えた週末。

千歌ちゃん家に集合し、沼津駅まで車で行くそうだ。俺も旅館前まで見送りに行った。

「徳丸さん、何か応援の言葉ありますか？」

「千歌ちゃん。それは自分たちから求めるものじゃないんだよ。」

みんな東京に行けるといふことで舞い上がってはいたが、緊張してるわけではなさそう。ひとまず安心。

しかし何か声をかける雰囲気ができあがってるな。何を言おう。

いや、まあ明日のライブに行けないわけではないんだが、もしかしたら間に合わないかも知れないからそれは黙つといて。

「そうだなあ。落ち着いて行きなさいってぐらいかな。ライブもライブ以外もね。」

東京にたどり着けるかが心配である。

「「それじゃあ行ってきまーす！」」
行ってらっしゃーい。」

その日の午後。明日の模試に備えて勉強してたら久々に体を動かしたくなってブラりと馴染みの店に来てしまった。こらえ性なさすぎるだろう、俺。

「いらつしやい。お、国木田くんだ。今日予約してたっけ？」

そこはダイビングショップ。高校に入り、趣味の一環として始めたダイビングができるお店。

店番をしていた…というより今から海に潜る準備をした女の子が声をかけてきた。

女子にしては高めの身長を持ち、青みがかつた長い髪を後ろで一つにまとめ、年上のお姉さん感を出している彼女は実は同じ年。名を松浦果南という。

このダイビングショップは彼女のお爺さんが店長をしているそうだが、今怪我だか体

調不良やらで店に出られず、代わりに孫の彼女が店に出ているらしい。

俺ももう二年も通う常連さんなので、そこら辺の事情は教えてもらえた。

「いや、予約はしてないよ。潜れるかなと思つてふらくつと寄つてみただけだから。」

潜る準備をしているということはお客さんがいるのだろう。そこに交じつて潜ろうとまでは思っていないため、帰ろうとするのだが。

「あ、ちよつと待つて。今いるお客さん達は部活で来ているみたいだから、私もつきつきりつて訳じゃないんだ。一人くらいのバデイならできるけれど。」

と、引き留められた。

どうしよう。ここまで来たからには潜りたくなつてきたし、お言葉に甘えさせてもらうかな。

松浦さんのダイバースーツ似合つてるしね。…おつと本音こつちじゃなくて建前こつちこつち建前。

うん。ちよつと運動した後くらいが勉強もはかどるし！

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ。ちやつちやと準備してくるね。」

「うん。更衣室はさつき言つたお客さんが使つてるから、ひとこと言つて入つてね。」

「うーい。」

店主がお爺さんからお孫さんに替わつてから、俺の来る頻度が上がったのは気のせいである。

気のせいと言ったら気のせいである。

コンコン。

「すいませーん。一緒に更衣室使わせていただきまーす。」
そう言いながらドアを開けて中に入ろうとすると。

ぬっ、と。

ドアの影から伸びた4本の腕によって口をふさがれた。
な、なんだ？

目を向けると金髪長髪でガタイの良いイケメンと、これといった特徴は無いが普通にイケメンなイケメンが得物を狙う目でこちらを見ていた。

「おい……。自由にして欲しくば俺たちの質問に答えろ。」

な、なんだって!?!自由にしてほしくば…自由に…。

…いや両手両足自由なんですけど。

「おいバカ!二人とも口しかふさがなくてどういふことだよ!」

「お前も両手使って口ふさがにいつてんじゃねえか!使えねえな!」

俺の口を全力でふさがながら口論する男二人組。

どうでも良いけど離してくれないだろうか。口周りだけ異常な熱気に包まれてきたんだが。

というか、これ危ない流れとかじゃないよね?

「あなた方が一緒に潜るお客さん?」

口をふさがれながらの発声であったため、「ふあなたがたがふいつしよにふおぐるおふあくふあん?」みたいな感じになっちゃったが彼らには通じたらしく

「ん?一緒に潜るかどうかは知らんが一応今から潜ることになつてゑぞ。もしかしてお店の人か?」

この人達が松浦さんが言ってたお客さんか…。お店の人ではないです。

とりあえず「ふおなふあふあえは（お名前は）？」とだけ尋ねると、やっぱり通じたらしく返事をくれた。

「俺は北原伊織。こっちの金髪で背の高い方が今村耕平。伊豆大学ダイビングサークル『PaB』で予約してるんだが…。」

そうか。北原さんと今村さんね…。ふりん…。

自分で聞いたといてなんだがそんなこと知るか！手を離せ！というか目的は何だ！

「目的…？あ、そうだった。」

ちよつとポカンとしていた北原さんは思い出したように目を開いた。

こいつ忘れてたな。

北原さんは最初のように真面目な顔に戻り

「さっきこの部屋から出ようとしたら見ちまつたんだが…。お前あの美人店員さんと知り合いか…？」

と聞いてきた。

続く。

「え？！続くの？！夢オチとかでもなく次話に続くの？」
はい。続きます。

バカとオタクとシスコンと女神

「松浦さんの連絡先を紹介してほしい？」

「ああ。海に来たからには難破の一つや二つやってこいと友達に言われてな。なかなか見知らぬ女の子に声をかける勇気が出なかったんだが、今度こそ、と思って君に声をかけたというわけだ。」

俺は見知らぬ女の子じゃねえ。そして海に来るたびに難破してたら身が持たんわ。

松浦さんの連絡先を教えて欲しいと声をかけてきたのは、前話の不審者の片割れで髪が黒い方の北原伊織さんだ。

見た目についての詳しい描写は苦手なのでGoogleの画像検索で『ぐらんぶる』で検索してください。間違っても『グランブルー』じゃないからね！

ちなみにもう一人の今村さんもこのナンパ作戦に乗り気らしい。「伊織には負けねえ…。」とか言ってた。

「いやでも、俺から連絡先を聞き出してもそれはナンパしたことにはならないと思いますよ？そういうのは本人からじゃないと。」

「むう。やっぱりそうか。最悪電話帳に登録さえしとけば友人たちには自慢できるから

良いかと思ったんだが。」

「ダメですよ（主に個人情報的な意味で）。」

溜息をつきながらそう答えると、二人はせっかく着たダイビングスーツを脱ぎ捨てて土下座しながら

「俺たちのナンパに協力してください！」

とか言い始めた。いやちよつと待てなぜ全裸になった。

「ああ、いつもの習慣で。」

これが大学生か…（違う）

「とはいってもそれに協力することで俺にメリットはあるんですか？」

「ふむ。メリットか…。何かして欲しいこととかあるか？」

ちよつと考えてみる。まあ特にはないんだけど…。

ああでもこの人たち伊豆大学って言ってただよなあ。

「じゃあ今度大学の案内をしてくれませんか？俺も伊豆大学を受けようと思ってるんですよ。」

「マジか！いくらでも案内するよ！」

どうせなら勉強も教えてもらおうつと。

つてな感じで女の子の連絡先を手に入れるより早く俺と連絡先を交換したお二人でした。

「みなさん！準備できましたかー？女性陣はオッケーですよー。」

松浦さんの声がドアの向こうから聞こえた。…女性陣？

「ああ。俺たちは今回ダイビングサークルの1年生だけで来てるんだが内訳がな。男二人と女二人なんだ。まあいいものとして考えてくれれば良いぞ。」

今村さんはそう言っていたが…。ナンパとかできんのか？これ。難破しそう…（しつこい）

更衣室から出て、受付がある待合室に行くと松浦さんとダイビングサークルの人らしき女性二人が待っていた。

「おっそいよ〜！伊織も耕平も……つてあれ？この人は？」

そう言つて声をかけてきたのはショートカットで、元気そうな女性。…自分の語彙量

のなさが嫌になる。よろしければGoogleで検索を。

「ああコイツは国木田だ。」

驚異の雑さ。伝わるかい！

そんな紹介だから女性二人が不審な目でこつちを見てるじゃないですか…。

「突然すいません。潜る時間が被っただけで、別に一緒に潜るわけじゃないんですけど…。」

そういつて弁解するも

「まあ待て国木田よ。ここであつたのも何かの縁だ。私達と一緒に潜らないかね？」

とか言ってくる北原さんがそこにいた。やべえ目が笑つてねえ。

「…じゃ、じゃあ僕も一緒に潜らせてもらおうかなあ…。あ、松浦さんも一緒にどう？」「私はお客様がいいならそれでいいけど…。」

どうです？と女性陣の方に向き直る松浦さん。男性陣は彼女がしゃべっている途中でサムズアップして了承のサインを出してた。

私達もそれでいいけど…と返事をしてくれたお二人に一通り挨拶を済ませる。

さつき声をかけてきた黒髪ショートカットの女性が吉原愛菜さん。もう一人の茶髪でクールそうな雰囲気の女性は古手川千紗さんというらしい。

二人ともなかなか…いや、かなりの美人である。

どうしてこんなに綺麗な人たちが身近にいるのにナンパする必要があるのでろう。気になって後で聞いてみたら今村さんは「3次元に魅力を感じない。」とか言っていた。それは今からナンパしようとしている人の台詞じゃねえ。

しかも北原さんと古手川さんは従兄弟らしい。ならしようがない…のか？

6人で潜ることになったため、各自荷物を持ち、栈橋まで歩く。

その道すがら、男衆3人はさっそくミツシヨン①をスタートさせた。

くミツシヨン①く

「いいですか。ナンパというのは基本的に相手に『連絡先の交換ぐらいは…』と思わせたから勝ちです。ならどうするのか。」

ゴクリとのどを鳴らす2人。ちなみに女性陣はだいぶ前を歩いているので聞かれない…と思う。

「もつときつい条件をふっかけて、そこからだんだん譲歩していけば良いんですよ。これは交渉術の基本でもあります！」

「おお〜！」

感心したような声を上げる2人。

ちなみにこの情報は以前ネットで調べたのでそこそこ信頼できるはずだ。…なんで調べたのかつて?ただ興味を持っただけだよー(棒)

「じゃあまず俺から行ってくるぜ!」

トツプバツターは北原さん。

たつたつたつと松浦さんの横へ走っていき、

「松浦さん。毎朝俺のために味噌汁を作ってくれませんか。それが嫌なら電話番号でも交換しません?」

………場に沈黙が流れる。

突つ込みどころはたくさんあるが、一番は言い方ではなからうか。世間の人はそれを脅迫という。

「お、お前は何かいきなりプロポーズしとるんじや〜!」

吉原さんが真つ赤にしながら北原さんにくつてかかった。顔を真つ赤にして。…お?そういうことか?

古手川さんはゴミを見る目でそのやりとり:というか主に北原さんを見てた。どんな目つて言えば良いんだろ。『ギャグ漫画日和』のウサ美ちゃんが、クマ吉くんを見るような目かな。

ちなみに言われた松浦さん自身は苦笑いだった。

くミツシヨン②く

「全く伊織は常識というものが無いから失敗するのだ。ここは俺に任せておけ。」

「面目ない…。」

「それで？ 国木田。次は何をすれば良いのだ？」

3秒前まで自信满满だったじゃないですか。

「そうですねえ。じゃあ、自分の良さをアピールしてみましよう。そして、向こうから

『あ、この人なら連絡先を教えてもいいかな』と思わせるのです！」

「なるほど…。俺の良さか。」

今村さんは背も高く、顔もイケメンで普通にしとけばかなりモテると思う。ちよつとオタクが入っているのかもしれないが、今日初めて会った人にそれはバレないだろう。

「よし！ じゃあ行ってくるぜ！」

自信满满に駆け出していった。そして

「僕はこのおかげで女の子の気持ちがよく分かるようになりました。だから……だから僕と一緒にエロゲーをしませんか？」

「今生の最後の言葉はそれで良いか耕平え……」

吉原さんが地獄の底から響くような声を発した。そりやそうだ。

逆にあなたの良さはそこで良いのかと不安になってしまふ。

古手川さんはゴミを見るような目で見てた。どんな目と言えば良いんだろうなあ。

『ギャグ漫画日和』の曾良くんが松尾芭蕉を見る目かな。

ちなみに言われた松浦さん自身はどん引きしてた。これは北原さんよりマイナスかな……？

くミツシヨン③く

「まだやるんですか……？」

惨敗したお二人がスゴい表情で俺に迫ってくる。

「当たり前だ。まだ成功してないからな。」

「とうか俺たちにアドバイスしても成功しないんだから、今度は本人に行かせてはどうだ伊織よ。」

し、心外だなあ！ちゃんとしたアドバイス（ネット調べ）を踏みにじったのはあなたたちじゃないですか……！

しかし俺の反論は届かず、俺が松浦さんの番号を聞き出すことになってしまった。
え？電話番号知らないのかって？俺の電話帳に入ってる女性は家族を除けば、マリー
ぐらいだぞ。

「しようがないですね…。じゃあ俺の秘奥義を見せてあげましょう！」

そう言い残し女性陣に近づいていく。

逃げちやダメだ。逃げちやダメだ。逃げちやダメだ！よし！

覚悟を決め息を吸い

「松浦さん！電話番号を教えてください！」

そう言って頭を下げた。こういうのはストレートに言うのが一番だったりするんだ
よ。

「おい！国木田！おい！」

後ろでなんか騒いでるけど無視。頭を下げ続ける。

…どうだ…？

松浦さんは溜息をつく

「さっきから騒いでたのはこれ？」

はい。そういうことです。

後ろから二人も合流して頭を下げ始める。：客観的に見るとすごく情けない構図。

「別に良いですよ？ 私もお教えしたいと思ってましたし。」

「ま…マジか！」

「ほら見ろ！俺たちが良い印象を与えてたからだぞ！きつと！」

それはない。

「ただ、今携帯持っていないのでダイビングが終わってお帰りになるときで良いですか？」

「もちろんです！ありがとうございます！」

そのあと普通にダイビングをした。喜びに満ちあふれた二人のテンションがうざかった。

「ふう！今日も良い海だったな！そう思わぬか国木田よ！」

「海から上がってもテンション高いよこの人達は…。」

え？ダイビングの描写が全くなかったって？

それはそうだろう。そういう漫画なんだから、『ぐらんぶる』ってのは。

ちなみに今は着替えも終わって受付の前でゆっくりしてるところ。

「皆さん今日はお疲れ様でした。じゃあさつき言つてた電話番号お教えしますね。」

わいわい騒いでると松浦さんがそう言つて俺たちの携帯を操作し始めた。

「はい。どうぞ。」

手渡された俺の携帯を見てみると

『松浦果南：090—0000—XXXX』

とちゃんと書かれていた。 × × × ×

おお…ついに女子の連絡先がこの手に…!

形容しがたいニヤニヤ顔で残る男性陣を見てみると、手を天に掲げて喜んでいた。

「ちよ、ちよつと一回電話してみても良いですか?」

興奮した北原さんが発信ボタンを押す。

P r r r r r P r r r r r

「はい。松浦ダイビンググショップです。」

「いやいや、松浦さん。自分の携帯にかかつてきた電話なんだからもつとフランクに…

出ても…あれ?」

見ると松浦さんが手にしているのは固定電話。お店のもの…?

こちらを見て満面の笑みで

「またのご利用お待ちしておりますので、ご予約はこちらの電話番号からお願いいたします。」

と言う松浦さん。

それを見てなんとも言えない微妙な表情をする男衆。

あれ…でも俺の携帯に登録されていた番号は固定電話用の番号じゃなかったような…？

そう思つてチラツと北原さんの携帯をのぞき込んでみると、やっぱり055（沼津の市外局番）から始まる番号が登録されていて、俺のとは別だった。

不思議に思い本人の方を見てみると俺の視線の意味を察したのか

「まあこれからお世話になるかも知れないからねっ。」

とはにかむように言われた。

北原さんたちは何のことか分からなかっただろうが…。

ちよつとドキツとして勘違いしそうになりました。

だが俺はすぐに勘違いして黒歴史作つてしまう系の男の子じゃないのだよ。

ま、たぶんお客さんとして…もしくは…スクールアイドル…かな。

そこらへんを聞くつもりだったのにバカ騒ぎして忘れてたな。ま、今度でいいや。

北原さんたちがレンタカーに乗って帰るのを見届けた後、俺も帰宅しましたとさ。

余談だが、北原さんは後日松浦さんに教えてもらった番号を『松浦果南（実家）』と登録して友人たちを驚かせたらしい。

涙ぐましい努力である。

保護者参観での子供自慢

p r r r r p r r r r

「あ、もしもし。俺だけど。今日どうだった？ちゃんと旅館に着けたか？」

「おう。それは良かった。そいで明日の発表順とか分かったか？」

「うん……うん……最初から2番目？そっか……。じゃあちよつと厳しいかもしれない。……うん。まあ模試受けてからだだから。ごめんね。」

「東京楽しいか？後ろでガヤガヤ言ってるけど。……うるっさいな」

「え？変な人に絡まれた？大丈夫だったか？」

「同じ出場者だったのか。それなら良かった。うん。じゃあ明日頑張つてな。」

「あ、お土産頼むぞ、いつもの。は？みんなに食べられた？よし、そいつらには帰つてきたらお仕置きが待つてると伝えておけ。あ、お土産はもう一度買つてくれ。金は出す。」

「え？ジャンプが土曜日に出てる？さすが東京だな！」

「じゃあおやすみ……。」

……ふう。長電話になってしまった。

「ジャンプが土曜日に出てるのは今度の月曜日が祝日だからだと思っよう？」
「うおっ！びっくりした…！」

突然掛けられた声に振り返ると、さつき別れたはずの松浦さんがいた。

今は土曜の夜。A q o u r s のライブを明日に控えた日である。

俺は今日あったことや明日の予定などを聞くためにまるに電話していた。

うちはお寺ということで、親父たちは朝が早い。だから家の中で電話するのは悪いかなあと思い、家の外で電話していたんだが。

「なんでここに？」

すぐ後ろにいたのに全然気がつかなかった…。知り合いで良かった…。

「眠れないからちよつとランニングでもしてから寝ようと思ってるね。走ってたら知り合いの声が聞こえたから。」

ちよつとランニング…？松浦さんの家からここまでどれだけあると思ってるんすか…。

見るとほほも上気していて、少しなどではない距離を走っていたことが分かる。

そんなに全力で走ってたら逆に眠れなくなると思うんですよ。

「それで？ 国木田くんが電話してたのは彼女さん？」

「いや、妹だ。今東京に行ってるな。」

「へえ……！ 妹さんいたんだ。なんで東京に？」

「ウチの妹はスクールアイドルをしてるな。なんか東京でライブするとかで……。」

と、そこまで言って松浦さんの表情が険しいものになっていることに気づく。

「どうかしたか？ ずいぶん怖い顔になってるぞ。」

「へ？ あ、ああ。いや、なんでもないよ。」

松浦さんは慌てて否定するが、なにか隠してるような気がする。

今の話になにか気が障ることがあっただろうか。

……いや、スクールアイドルのことか。ついでに今聞いちゃおうかな。

「そういうえば昼間に聞こうと思ってるだけだ。」

「ん？ どうしたの？」

口に出してから逡巡する。果たして今聞いてもいい話なんだろうか。

……いや、遅かれ早かれ聞かなきゃいけないことは分かっている。だが、あのマリーですら自分から話そうとはしてないんだ。だったらもう少し待つべきなんじゃないだろうか。

「…いや、やっぱりなんでもないよ。」

「ふくん。変なの…。」

松浦さんは怪訝そうな顔をしたが、すぐに気を取り直したのか笑顔になった。

「まあいいや！じゃあボチボチ帰るね。ずいぶん遠くまで来ちゃったし。」

おう。確かにもう良い子は（まるは）寝る時間（すでに寝てる）だしな。

まあそんなに時間は経ってないんだが。最初が遅かったし。

「送ってどうか。さすがに女の子一人で帰すわけにはいかないし。」

「ありがとう。でも私全力で走るけどついてこれるの？」

むかつ。

「自転車なら…なんとかか…。」

だってこの子の持久力ハンパないんすよ…。

翌日。日曜日。

朝起きていろいろ準備して模試受けて今は沼津駅にダイヤさんとAqoursのお出迎えに来てる。

「おやおや？あなたは『Aqoursのことは任せとけ。』とか言っておきながら、そこから数話の間さんの活躍もしてない徳丸さんじゃないですか。」

「そういうあなたこそ『ルビイに変なこと教えないで。』とか言っておきながら、そこから数時間に渡って自分がいかにルビイちゃんの良さを作り上げたかを話してくれたダイヤ様じゃないですか。」

「ダイヤ様と呼ぶなと言っているでしょ！…このシスコン…！」「シスコンゆるなし！…ってかどの口が！」

「むむむ…！」

…な・か・よ・く・お迎えに来ております。

時刻は夕方。さつき『次の電車で帰る』という連絡が来たため迎えに来たら、この人と鉢合わせしました。

ちくしょう。Aqoursの保護者ポジションは俺一人で十分だというのに…！

「…結果のことは聞きましたの…？」

ダイヤさんがこちらをにらんでいた目をそらしながら尋ねてきた。

結果と言うのはもちろん東京ライブのことなのだろう。

さつき…さつき電車の時間と一緒に連絡があつた…。

結果的にダイヤさんの言っていたことが的中したことになつてしまった。

無言を肯定と受け取つたのだろう。

おれの返事を待つことなく、続ける。

「これから。」「へ?」「彼女たちは”これから”だと私は思いますわ。」

予想外に前向きな声で前向きな言葉が聞こえたのでびつくりしてしまった。

彼女はスクールアイドルに反対していたはずでは…?

そう思いダイヤさんを見ると、自分でもキャラじゃないのだと思つてるのか少し

赤くなつて顔を背けていた。

はいーツンデレいただきましたー。

「ああ。俺もそう思う。だから俺たちがしっかり支えてやらないとな。」

「ふ、ふん!あなたにはルビィ以外をよろしくお願いしますわっ!」

「おいちよつと待てルビィちゃんは俺の妹だろ?」「あ!?!」「すいませんでした。」

さてさて、各家庭の妹自慢をしていたらどうやら主役たちが到着したようだ。

駅に電車が到着し改札から6人の女の子たちが出てくる。と、同時にその何倍もの女の子に囲まれていた…。

あれ浦の星の制服もあるけれど、俺が通ってる高校の制服もあるような気が…。

「ほら、ここにほんなにファンがいるのですから。」

そんなの分かってるし。ってかなんであなたが自慢げなんだし。

ある程度同級生やファンのお出迎えがすんだのか、6人が人混みから出てきた。やつぱり少し元気がないように見える。

いつも通り振る舞ってる（ように見える）のは…千歌ちゃんと…よっちゃんぐらいか。向こうもこちらに気づいたのかまつすぐこっちに向かつて歩いてきた。

ホントに足が重そうで、一瞬なんて声をかけたものか分からなくなってしまう。

だが、ダイヤさんは迷ってる俺に気がつくことなく優しい声をかけていた。

「おかえりなさい。」

「おねえちゃん…!」

俺もかける言葉が見つからず、同じ言葉を繰り返す。

「…おかえり。みんな。」

「徳兄い…。」

う、うわあん。と、ルビイちゃんがダイヤさんに抱きつく。

やっぱりつらかったのだろう。人の目もはばかりに泣いていた。

まるも来て良いんだよ…?と思っていたが来なかった。

ルビイちゃんが落ち着くのを待ったために港で休憩することになった。

移動する際もどこか暗い雰囲気がつきまとう。

俺は一番後ろをゆっくりついて行く。

最後尾でいつでも通りに振る舞っているよっちゃんに声をかけてみた。

「お疲れさま。東京はどうだった？」

「徳くん…。そうね、ヨハネのリトルデーモン候補がたくさんいたわ。やつぱり東京にはヒトを墮天させる力が集まるようね…。あと、ご飯からお菓子までおいしいものが多かったわ。」

「そうか。んで？俺のお土産を食べたのはヨハネなのか？この口か？」

「ふえ…ふお、ふおっと！ふあなふいふあふあいふお！」

両ほほをつまみ、いじくり回す。

涙目になって子音が全てFになって抵抗してくるまではテンプレート。

やわらかい感触を少しの間楽しんだ後、手を離す。

少し責めるような目でこちらをにらんでくるが、それは無視して告げる。

「無理してないか？もう俺もダイヤさんもいるから、無理に明るく振る舞わなくても大丈夫だぞ？」

さつきよっちゃんは『リトルデーモン候補』と言った。

彼女は自分のファンのことをリトルデーモンと言っている。それを『候補』と言った

意味…。

やっぱり彼女も内心では傷ついているのではないかと思つたのだ。
と、突然神妙な顔して立ち止まる。

的外れなことを言つて怒らせちゃつたか…？と思つたけれど。

「はあ…なんでわかっちゃうのかしら。」

と苦笑いだつた。どうやら当たつていたらしい。

「何でと言われてもなあ…。なんかいつもと違つたから。」

よつちちゃんはその言動とは裏腹に、精神年齢はすごく高いと思う。

だから気を遣うことにも長けている。そんな場面を何度か見てきた。

「今は普通にしているんだぞ？今日は甘えて良い日だ。」

「うん…そうね。そうだよね。ありがとう。」

そう言つて自分で頭の羽を外すと。

他のメンバーがこちらを気にせずに前に歩いているのを確認して。

背後から抱きついてきた。

背中には暖かくやわらかい感触。

「おおっとこれは想定外というか心臓止まるというかほらみんなが見てるというか。」
見てないけど。

「…うるさいっ…！！今日頑張ったんだから良いでしょ…！徳くんが甘えていいって
言っただし！」

その声を聞いててんぱっていた心が冷静になる。

よつちゃんの顔はここからでは見えないが、その声は…湿っていた。

…年相応なところもあるじゃないか。

「……今日見に行けなくてごめんな。」「別に良いわよ。忙しかったんでしょ。」
「A q o u r s のことありがとう。」「こっからは任せたわよ。」

「任せられた。」

自信を持って返事するとふつと背中から感触が消える。

振り返ると頭に黒い羽をつけた墮天使の姿が。

「ヨハネは復活したわ！待たせたわねリトルデーモン！」

「だからリトルデーモンじゃないっちゆうに。」

目を少し赤く腫らしながらも、その他は完全にいつものよっちゃんだった。

「お〜い。ふたりとも置いてくよ〜。」

「今行く〜！」

千歌ちゃんにふたりで返事しながら、リトルデーモンはここからどんどん増えていくんだらうなと内心思った。

前へ

ゼロ票。

東京のライブバトルで『A q o u r s』が得た票数である。

もちろん最下位。他にゼロ票のグループがあつたわけじゃない。純粹に単独で最下位だつた。

そして彼女たちは壁にぶつかり、悩んでいる。

たぶん前向きな考えよりは暗い考えの方に傾いているのではないだろうか。

ライブで失敗したわけじゃない。それがさらに追い打ちをかけているのかも知れない。

自分たちの精一杯を出せたのにも関わらず、誰からも票を入れてもらえなかった。

それがどんなに辛いことなのか。

当事者じゃない俺は口が裂けても分かるとは言えないが、俺の役目は6人のフォロー

だと思う。

ま、まあよっちゃんは復活したみたいだけどな！

さて、俺たちは駅から港へと移動した。

あまり人目が無いところで落ち着いて話したかったからだ…ダイヤさんが。みんなで座れるところを探し、落ち着いたところでダイヤさんが口を開く。

「あなた達は歌えただけ立派ですわ。私達なんて…。」

…ん？私達？

皆も疑問に思ったのかダイヤさんに不思議そうな顔を見せる。

それに気づいたのか

「昔浦の星にもスクールアイドルがあつてですね…。」

と教えてくれた。

「ええええええ！そうだったんですか!?!」

「いや徳丸さん。あなたは知っていたでしょう。」

「皆の気持ちを代弁してみました。」

マリーから教えてもらってました。実際に当時会ったこともあるし。

でもあんまり詳しいことは知らない。昨日も松浦さんから聞くチャンスはあったものの格好つけて『大事なことは親友のマリーから聞きたいから。』とか言っていて知らない。

「徳兄いはなんで知ってたずら？」

「昔マリーから教えてもらった。ダイヤさんともその時に会ったことあるぞ。」

「夜空はなんでも知ってるずら？」

「それは知らん。」

「それなら私達に言ってくれても良いじゃないですか！もしかしたら理事長とかからアドバイスもらえたかも知れないのに…。」

千歌ちゃん抗議してくるが、教えたところでこの3人が素直にアドバイスしてくれるとは思わない。

それに、今はやってないという時点でなにか地雷のような気がしたからな…。秘密にしといた。

「徳丸さんなりの考えがあったのでしよう。たぶん彼なりの考えが…たぶん。」

「おいその”たぶん”をやめろ。せつかくのフォローが台無しじゃねえか。」

なんかダイヤさんは俺をいじって遊んでる気がする。

ジト目でにらむと目をそらしやがった。

そのまま気を取り直して本題に戻る。

「おつほん…：話を元に戻しますけれど、私達は昔東京に呼ばれたとき歌うことすらできなかつた。その点であなたたちは立派ですわ。だけど、歌えたところで通用しなかつた。その点をどう今後に活かすかを考えなさい。」

6人は下を向いて沈黙する。やはり、外部の人に事実を突きつけられるとイタイのだろう。

…今後…：か。

今彼女たちに言うべき台詞は何だろう。生半可なことを言ったら逆効果だと思う。

『もうちよつと頑張ればなんとかなる。』『地元じゃ無かつたから仕方が無い。』『呼ばれただけでも名誉なことだ。』

そんな言葉じゃ…。これからつながらない。

いま必要なのは自分たちの立ち位置を確認すること。

ラブライブに挑戦し、優勝を目指すことがどれほどのことなのか、そして自分たちはスタートラインに立ったばかりでライバルたちは先に進んでいるということを受け止

めなければならぬ。

もう一つ必要なのは…。

「ま、まあ！ 私たちは始めたばかりなんだし！ これから頑張っていこうよ！」

…千歌ちゃんや俺が飲み込んだ言葉を発する。

空元気。端から見ても無理していることが分かる痛々しい笑い顔だった。

それを見たA q o u r sのメンバーもなんとも言えない表情を浮かべ、返事をするものはいなかった。

「素直になれよ。」

「…え？」

…気がついたら口に出していた。

ダイヤさんがあちゃーって表情をしているけど気にせず続ける。

「これから頑張ろうとか、始めたばかりだから仕方ないとかじゃなくて、悔しいなら悔しいって言えよ。そうやって燻ったまま無理矢理その気持ちを飲み込んでも次にはつながらねえよ。」

「特に…特に千歌ちゃんはA q o u r sのリーダーなんだ。君がそこで立ち止まってしまったら後ろには誰もついてこないぞ。」

沈黙。A q o u r sのみんなもダイヤさんも俺の顔をビツクリしたように見ている。俺がこんなことを言うのが意外だったのだろうか。

千歌ちゃんは…千歌ちゃんだけはひとり俯いていた……かと思うと

「これくらいで心が折れるんならスクールアイドルなんてやめ「あくもうっ！うるさしうるさしうるさしうるさしうるさしうるさしー！」ってええええ!？」

顔を真っ赤にして叫びだした。な…なに？これがゆとり世代…？

「わかってるっ！分かってますよっ！でもわかんなかった！私だっているいろいろ考えてたのに！リーダーっていうか、言い出しっぺとしてしつかりしなきゃとも思ってたっ！なのにつ…それなのに…！」

「格好つけて『素直になれよ。』なんて言っちゃって！私そこまでバカじゃないですからねっ!？」

そこまで思いつきし叫ぶ。そして息継ぎして

「徳丸さんのバカ…！…！…！…！…！」

捨て台詞を残して走り去ってしまった。は、はやっ！

「ちよっ、千歌ちゃん!？」

追いかけてようとするが、曜ちゃんと梨子ちゃんが俺の腕をつかみ、制止させる。

「徳丸さん！私たちが追いかけますから！」

「千歌ちゃんの扱いは長年の付き合いの私に心得てますから！（余計なことしやがって！千歌ちゃんに厳しい言葉を言うのは私の役目だったのに!）」

なんか曜ちゃんの笑顔が怖いんだが…。

「お、おう。よろしく頼むわ…。」

そう告げると二人は千歌ちゃんを追いかけて行ってしまった。残されたのは俺と一

年生組とダイヤさん。

誰も言葉を発しようとしないのでアイコンタクトで質問する。

……言い過ぎましたかね？

と、まるが近づいてきて俺の肩に手を置き

「言い過ぎずら。」

と慰めるように言った。オウ…やつぱりそうか…。

「ルビイちゃん。まる達も行くずら！」

「え、花丸ちゃん!?び、ピギイイイイ！」

ああルビイちゃんの声が遠ざかっていく。どうやら一年生組も千歌ちゃんのところに行くらしい。よっちゃんも「ヨハネも暗黒に吞まれたリトルデーモンの心を救いに(以下略)」と追いかけていった。

「…ダイヤさんは行かないんですか？」

「はあ…。私が行ってどうするんですか。」

溜息とともに、呆れられたように言われてしまった。

そうだよな。ダイヤさんはもう伝えるべきことは伝えてるもんな。流石ですわ、お姉様。略してさすおね。

「まったく。あそこまでストレートに言わなくても他に言い方があったでしょうに。」

うぐつ。ツンデレのダイヤさんに気持ちの伝え方について言われるとちよつとクルものがあるな。

「まあでも言ってることは間違ってますから。私も言いたかったことを憎まれながらも言ってくれたことには感謝してますわ。」

「あれ。ダイヤさんも思ってたんだ。」

「ええ。千歌さんが『負けたのはしょうがない』みたいなことを言ったのでちよつとプチンと来ましたが…。徳丸さんが言うとは意外でしたわ。」

「俺だつて言うときは言うさ。ダイヤさんともAqoursを支えていく約束をしたしな。」

「そう言つて前回まで働かなかつたではないですか。」

まだそのネタを引きずるのか。

「なんだかんだ徳丸さん甘そうですから。今回も見逃すのかなくと。もし見逃していたら…。」

「見逃していたら…?」

「少なくともあなたがいる限りルビイのAqoursの参加は許しませんね。」

…あつぶね! サラツと試されてたよ。しかも失敗したら俺じゃなくてルビイちゃんに迷惑かかつてたし。

なんとか今回の試験は合格したようだ。

「さ、あなたも追いかけて来なさい。今なら千歌さんも落ち着いているでしょう。お迎えに来てくださっている親御さんたちには私から言っときますから。」

ヤバイダイヤさんかつこいいい…。

「さすおね!」

「さ、さすおね?なんですか?それは。」

最高級の賛辞です。

そう言い残し俺は千歌ちゃんたちの方へ走り始めた。

「はあ、はあ。あいつらどこへ行った!」

かつこよく走り出した俺は千歌ちゃんたちを見つけられず、走り続けていた。

千歌ちゃんのことだから海岸線をずっとまっすぐだろう。とか思ってまっすぐ走ってきたがアテが外れたようだ。

これがなぜかヒロインのいる場所を察知できる世の鈍感&難聴系主人公と俺との違いかとバカなことを考えながら走る。

残念ながら千歌ちゃんレーダーは俺にはついてなかったらしい。

しようがないから妹レーダー（携帯のGPSとも言う。まるはキッズケータイなので家族から居場所が探せるのだ。）を起動させ、見てみると少し先の海上で反応していた。

…海上でオイ。

何してんだ？

その疑問は合流してみると分かった。

「悔しいよっ！だって0票だったんだよ？あんなに頑張つて練習して、衣装も曜ちゃんが可愛いのを作って、曲も梨子ちゃんがスゴいのを作って、カワイイ一年生が三人も入ってくれたのに…！誰からも評価されなかったんだよ？悔しいに決まってるじゃんっ！」

そこには膝まで海につかつて、梨子ちゃんに抱きつきながら泣いている千歌ちゃんと、それを見守るAqoursのメンバーがいた。

どうやら千歌ちゃんもメンバーの前でようやく素直になることができたみたいだ。

…俺がいない方が良かったのだろうか…。

砂浜で軽くへこんでいる俺を誰かが見つけたようで、6人ともこつちに向かつてきた。

俺の前で一列に並ぶ。俺の正面には千歌ちゃんが立った。

「と、徳丸さん。」

先に千歌ちゃんが口を開く。

「さっきはバカとか言つてすいませんでした！ 私たちのことを思つてのことだったのに… 私思わずカツとなつちやつて。」

「いいよ。つてかこちらこそゴメン。当事者じゃない俺が口やかましく言つたら反発しなくなつちやうよな。それに言い過ぎだった。ホントにゴメン。」

二人して頭を下げ合う。

そしてほぼ同時に頭を上げたときには千歌ちゃんは笑顔になっていた。

さつきまでの虚勢を張つた笑みではなく、いつもの明るい笑顔に。

「私も許します！ えへへ、じゃあこれで仲直りですね！」

そう言つて右手を差し出してきた。

「ああ。仲直りだ。」

その手をつかみ、がっちり握る。

その手は女の子の柔らかい手だったが、千歌ちゃんの意志の強さを伝えるようにこちらを強く握りしめていた。

「じゃあ最後に一つ良いかな。」

「なんですか?」

そのままの体勢で千歌ちゃんに聞く。

「東京から帰ってきたAqoursに必要なことは現状を素直に受け止めることと、もう一つ。この体験から明確な目標を掲げて欲しいんだ。」

Aqoursとして活動する上での軸になるものを。

μ'sは廃校を阻止するためにスクールアイドルを始めたらしい。千歌ちゃんはそんな彼女たちに憧れたと言っていたが、憧れだけじゃこれから先やっていけない…と思う。もちろんきっかけとしては十分だが。

そう告げた俺に対して、なぜかクスクスと笑い出すAqoursの6人。

「:…どうした?なんか俺変なこと言ったか?」

「いえ:…、さつきちようどその事について話し合っただけですよ。」

答えてくれた梨子ちゃんと、それに頷くメンバー。

「じゃあ教えてもらってもいいかい?」

【幕間】雨降って地固まる

「馬鹿って言っちゃったよお〜。」

旅館『十千万』。

その建物は旅館として利用されている表の部分と、経営する家族が住んでいる住居部に別れている。

さすがに従業員が浴場を利用するわけにもいかないのだ。

その住居部の風呂にて。

一家の一人娘である千歌は湯船につきりながら、一人反省会を開いていた。

「徳丸さんはああ言って許してくれたけど…内心怒ってたりしないかなあ…。」

何を反省しているかというのはお察しの通り。徳丸とわずかな期間ながらも喧嘩してしまったことだ。

今日の話なのだが、東京でのライブから帰ってきたAqoursはこれからの進退を決める重要な岐路に立たされていた。

ゼロ票という得票数だったことは今思い出しても辛くなる。

素直に弱音を吐き出したいとも思った。悔しいと。

ただ、千歌はリーダーとしての責任感から自分だけは辛そうな顔をしてはいけなくも思っていた。

私が本当の気持ちを言ったら、A q o u r s は立ち直れずにここで終わってしまうのではないかと。

…そこにデリカシーのない無責任な輩がズケズケと歯に衣着せぬ物言いをするものだから少し頭にきてしまったのだ。

「いや、千歌さすがにそこまでは思っていないよ!？」

まあそんな感じで喧嘩してしまったのである。

その後他のA q o u r s のメンバーから「素直になって良いよ。」と言われ、気持ちを吐露した結果、より深い絆を得ることができた。

徳丸の言っていたことは少しキツかったが事実だということも理解できたため、すぐに仲直りすることができた。徳丸の方も言い過ぎだといろんな人に言われたらしく、深く反省していたし。

「しかし徳丸さんって私たちのことを思ってくれてるんだなあ…。」

今日一日のことを思い出すと、徳丸さんやダイヤさん、口には出さないがマリーさんや果南ちゃんも応援してくれていることが分かる。

特に徳丸は衣装の裁縫、曲作りのアドバイザー、踊りの監修、移動のチケット予約など献身的に働いてくれているのだ。

……

……

……

……

「いや働き過ぎじゃない!？」

「徳丸さんにお礼？」

「うん！よく考えてみたら徳丸さんのおかげで私たちとつつつても助かっていると思うんだ！」

「そっか…。確かにA q o u r sとしてやらなきゃいけないことのほぼ全てに関わってくれてるしね…。私の衣装作りとか。」

「私の曲作りもそうね。」

「だからね、ここらで何かお礼をしようと思ったの！どうかな？」

翌日。学校に行くバスの中で私は残りの2年生二人にある提案を持ちかけていました。あ、高海千歌です！よろしくね！

昨日風呂から上がった後も考えたのですが、徳丸さんがA q o u r sのためにやってくれていることはかなり多くて、一度ちゃんとお礼をしなきゃいけないという結論に至ったのです。

「うん。とてもいい考えだと思う。私も協力するわ。」

最初に賛成してくれたのは梨子ちゃんでした。梨子ちゃんはA q o u r sの作曲担当です。最初は「私アイドルの曲なんて知らないっ！」なんて言っていた梨子ちゃん

すが、最近はすっかりスクールアイドルの虜。とりこりこです。

「ヨーソロー！ ナイスアイディアだよ千歌ちゃん！ この前衣装作りも手伝ってもらったし。」

曜ちゃんも元気に返事をくれました。本人も言っていました。曜ちゃんが一人でやっていた衣装作りを徳丸さんも手伝っています。そのおかげか二人は仲がいいです。まあA q o u r sの中に徳丸さんと仲が悪い人なんていませんが。

それじゃあ改めて3人で何をすればいいのか考えましょう。3人寄れば文殊の知恵ですから！

「徳丸さんに対するお礼って何をすれば良いのかな…。」

「みかん！」

「海軍の制服をあげれば喜ぶと思うな！」

「花マルちゃんのお人形…かしら？」

上から私、曜ちゃん、梨子ちゃんの順です。

…さつき3人寄れば文殊の知恵と言いましたね。あれは嘘です。

3人でグループ名を考えた時のことを思い出してみましよう。この3人でまともな案が出るわけがないのでした。

「ちよつと！ 偉そうなこと言ってまとめようとしてるけど千歌ちゃんも変だからね！ み

かんが嫌いな静岡県民だっているんだから。」

「まあまあ……。徳丸さんが喜ぶことをしてあげないといけないんじゃないかな……。？その点で私の花丸ちゃんお人形というのは……。？」

「……うん！ちよつとこの3人じゃあの時の二の舞になりそうなので、助っ人を呼ぼう！

「と、いうことで。一年生の意見を聞かせて？」

お昼休み。私たちは6人揃って屋上でお弁当を食べていました。

朝の2人に加えて、黒澤ルビイちゃん、津島善子ちゃん、話題の人物である国木田徳丸さんの妹の花丸ちゃん。私を入れてスクールアイドルA q o u r sの6人です。

「徳丸さんの好きそうなこと……。ですか。」

「うん！ルビイちゃんはなにか知ってる？」

と、私は考え込むルビイちゃんに尋ねました。

たぶん花丸ちゃんに聞けば一発なのでしょうが、それじゃおもしろくな……もとい、家族以外の目も大事だと思っただけです。ホントだよ？

「この前ウチに来たときにお姉ちゃんとプリン談義をしてたから、たぶん甘いもの好きだと思う。」

「事実ですか？花丸先生。」

「あつてるすら。……ってか確認するなら最初から私に聞けば良いじゃん。」

「どうやら事実のようです。なるほど……。食べ物路線なら甘いものですか。」

「善子ちゃんはなにか案あるかな？」

花丸ちゃんの抗議は華麗にスルーして、次のインタビュです……しかし。

「ちよつと待ってね。黒澤家に徳くんが行ったつて言う事実をもう少しk w s k掘り下げないといけないから。」「そうだったすら。」

ルビイちゃんの口にした“ウチに来た”に過剰反応してそれどころではないようです。

そしてそれに花丸ちゃんも乗っかっています。目が怖いのです。夫の浮気を耳にした妻みたいな感じですよ。

いやはや。恋する乙女は一生懸命ですnee。…え？違う？実妹？

きーんこーんかーんこーん。

あらあら。一年生組がいろいろやつてる間に昼休みが終わってしまいました。急いで残りのパン…じゃなかったお弁当をかきこんで教室に戻るとしますか。

きーんこーんかーんこーん。

再びベルの音が鳴って目を覚ましました。…目を覚ましました。

どうやら5時間目は寝ている間に終わってしまったようです。

クラスの皆が後片付けをして、教科書を鞆にしまい、その鞆を持ってにこやかに談笑しながら教室から出て行きます。

…え？帰るの？6時間目は？

「千歌ちゃんが寝てる間に6時間目まで終わったわよ。」

その声に顔を上げると、そこには苦笑いしている梨子ちゃんの姿が。

「もう！見てたんなら起こしてよ〜！」

と抗議をしたのですが、「幸せそうに寝てたから…。」と笑って流されてしまいました。
「昨日は夜遅くまで起きてたの？」

「うん。徳丸さんへのお返しの話を考えてて。…結局何にすれば良いのかな〜？」

ふと思ったのですが…徳丸さんは何のためにAqoursの手伝いをしてきてくれるのでしょうか？

最初は花丸ちゃんの付き添いといった感じでしたが、東京に行った前後からより積極的になってきている気がします。

そんなことを考えていると

「高海千歌さんはいますか？理事長がお呼びですわ。」

教室の入り口から私を呼ぶ声が。

見てみるとそこには生徒会長の黒澤ダイヤさんがいました。

彼女は、最初こそ私たちのスクールアイドルに反対していて”理不尽だ〜”と思っていきましたが、実は私たちのことを思ってくれていた優しい人です。

私もこんなお姉ちゃんが欲しかったなあ。

「私はここにです！」

教室の中から手を振ると、「理事長が呼んでますわ。ちゃんと伝えましたからね？　では私はこれで。」と言つてそそくさと帰つてしまいました。

むむう……。昨日のお礼をしようと思つたのに……。

……照れてるのかな？

廊下の奥から「照れてませんわあ〜！」と声が聞こえたような気がしたけれど、たぶん気のせいでしょう。曜ちゃんと梨子ちゃんに先に練習を始めてもらうよう頼んで理事長へ歩き始めました。

コンコンとドアを叩きます。

「ドウゾー！」

部屋から理事長……マリーさんの声が聞こえます。

中に入ると、碇ゲンドウのような座り方をした理事長がこちらを見ていました。伝わりますよね？

「失礼します。…どうかしましたか？」

「そんな緊張しなくて良いわよ。別に取って食おうなんて思っていないから。」

ケラケラと笑いながら優しく笑いかけてくれました。そのおかげでだいぶ緊張が和らぎます。

まあ緊張してたのは指令座りのせいなのですが。

「今日呼んだのは東京での感想を聞きたかったからなのだけど…どうだったかしら？」

…：そういえば今回の東京でのライブはマリーさんの許可で行かせてもらったのです。

ダイヤさんの話ではマリーさんと果南ちゃんと3人でスクールアイドルをしていたとのこと。なんだかんだで私たちのことが心配だったのでしよう。うん！何事もポジティブシンキング！

「私たちの得票数の話は聞きましたか？」

そう尋ねると一瞬だけ悲しそうな顔を見せるマリーさん。

「…：やっぱり辛かった？東京という舞台はあなたたちにとつてso hard だった？」

カタコトの英語にもいつもの覇気がありません。

ですが、そんな心配はご無用！昨日のうちに回復したのです！

「大丈夫です！ A q o u r s のみんなやダイヤさん、それに徳丸さんがついていましたから！」

だから私たちはこれからも頑張ります！

そう伝えました。

「……ふふつ。そうなのね。やっぱりあなたたちは乗り越えた。さすがだわ。」

心底安堵したかのようにマリーさんは眩きます。付け加えて

「トツクーもちゃんと仕事したみたいじゃない。安心したわ。」

その言葉を聞いて、昨晚からずっと考えていたことを思い出します。

…そうだ！ マリーさんにも聞いてみよう！ この人は徳丸さんとも仲が良いんだったと。

「徳丸さんと言えばマリーさん。実はかくかくしかじかで…。」

「トツクーにお礼？ あなたたちが気持ちを含めたものならあの子は何でも喜ぶわよ。」

それが一番困るんです…。

「うん。そうねえ…。」

そこで何か思いついたのか、マリーさんはいたずらっぽい笑みを浮かべると

「やっぱりあなたたちにしか出来ないことが良いと思うわ。」

「私たちにしか出来ないこと…。」

私たち：それはA q o u r s のことでしょう。じゃあA q o u r s にしか出来ないことって何だろう。

うんうんと首をひねって唸る私にマリーさんはヒントをくれました。

「あなたたちは何者なのか…。さあ！私のヒントはこれまでよ！これで思いつかなかつたらアホのビンタをお見舞いするからねっ！」

と華麗にウィンクを残すと、私の背中を押し理事長室から追い出してしまいました。…アホのビンタって…。また懐かしいものを…。

「私たちは何者なのか…か。」

「何者って…また変なこと考えてるの？」

「え？」

独り言の呟きに返事が来たので振り返ると、そこには果南ちゃんがありました。つてあれ？

「ここ学校だよ？どうして果南ちゃんがいるの？」

「その言い様はさすがに傷つくよ…。」

ああ！あの果南ちゃんが凹んでいる！

あまりの珍しさに思わず一枚写真を撮ってから誤解を解きにかかります。

この人は松浦果南ちゃん。私の一つ年上の幼馴染みです。

「ゴメンね。休学してるって聞いてたから。今日はどうしたの？」

「うん。家の都合がついたから復学しようと思って。」

と、手に持った復学届をピラピラと見せてくれました。

「ホントだ！これでまた一緒に遊べるね！」

遊びに来ている訳じゃないんだけどな…と、苦笑いする果南ちゃん。

ここであつたのも何かの縁です。徳丸さんと関係はない果南ちゃんにもさっきのマリイさんのヒントについて聞いてみます。

「さっき言つてたヤツ？千歌たちは何者なのかつて。」

「うん。そうなんだ。それにちなんだお礼をすると良いつて言われたんだけど…。」

「ふうん……。ま、マリーにしては良い考えじゃない。」

「え？果南ちゃん分かったの!？」

「多分この学校のみんなも分かると思うよ。分かっているのは千歌たちだけ。」

「うわあん。もつと分からなくなってきたよお……！」

と、一般性との下校を促すチャイムが鳴りました。部活生以外はもう下校時刻です。

「うわっ。もうこんな時間。じゃあ私は行くね。国木田くんによろしく〜！」

果南ちゃんはそう言い残して慌てて走って行きました。

あれ？私徳丸さんの名字言ったっけな？

「ゴメン。遅くなった!」

屋上へと行くと、残りのA q o u r sのメンバーが円になって座っていました。

「あれ…?何してるの?」

その疑問にはルビイちゃんが答えてくれました。

「休憩時間に今日の昼千歌さんが言っていた徳丸さんへのお礼について話し合ってたんです。でも良い案が思い浮かばなくて…。」

「だめだー。いまいちピンと来ない…。」

「曜ちゃん。もうちよつとだけ考えてみましょう?」

「もう少し…もう少しで墮天使イザークのお告げが降ってくるのよ…!」

その光景を見て、私はとつても嬉しくなりました。

私の言ったことを覚えてくれてたのもそうですが、みんな徳丸さんへの感謝の気持ちを持ってしていると改めて分かったからです。

「花丸ちゃん。徳丸さんの趣味って何かな?」

私も負けじと話し合いに参加します。…花丸ちゃん頼みですが。

「運動は全般的に好きずら。あと、歌うことも好きだったなあ。」

「それだ！それだよ！」

「『『『『へ？』』』』」

そこで私はさつき先輩2人から言われたヒントをみんなに伝えます。

私たちにしか出来ないこと。私たちは何者か。

「私たちはスクールアイドルAqoursなんだから、スクールアイドルらしく気持ち
を伝えたら良いんじゃないかと思っただけど…どう？」

恐る恐るみんなの反応を伺います。

「良い…それ良いよ千歌ちゃん!」「なんで思いつかなかったのかしら…盲点だったわ。」
「素晴らしいアイディアね。流石リトルデーモンよ。」「それなら徳兄いもきつと驚くず
らあ…!」「そうと決まれば頑張るびい!」

…どうやら好評のようで良かったです。

さて、それではA q o u r s による特別企画『今までのお礼&馬鹿つて言っちゃつて
ごめんなさい記念 みんなで作る感謝の歌』を始めましょうか。これは企画倒れとかに
ならないよね…?汗

風邪をうつすためにちゅーなんてしませんっ！

突然だが、各家庭には風邪を引いた時にのみ出される特別な料理があるのではないだろうか。

自分が熱を出してキツイ中、母親が作ってくれたとびっきりの病人食を食べるとき、「ああ、苦しいけど風邪を引いて良かったな。」と思ったりするものだ。

あなたの家の病人食はなんだろう。

おかゆ。ハニートースト。うどん。

いつもなら普通に感じるご飯だけど、幸せな気持ちになれる魔法のご飯。

国木田家での魔法のご飯は

りんごである。

「まるく？起きてるか？入るぞー？」

そう声をかけて花丸の記号が描かれている板がかけられたドアを開ける。

中を覗いてみると、布団からまるがもぞもぞと起き出してくるところだった。

「りんごすり下ろしてきたぞ。食欲あるか？」

こくと頷く我が妹。

それを見て俺は枕元までお盆を持って行く。

お盆の上にはすり下ろしたりんごごとスプーンのみ。これが国木田家スタイルなのである。

俺が生まれた頃から変わらない。話によると俺の母親も風邪を引いたときはコレを食べていたらしい。家庭の味である。

「自分で食べれるか？なんなら俺が”あくん”しても…。」

と、そこまで言ったところで強引に俺の手から奪い取られるお椀とスプーン。

マスクをしているせいで表情は読み取りづらいが、おそらく自分で食べられる!といったところだろう。: おそらくじやなく絶対そうだな。

高熱があっても俺に対する態度は変わらないようだ。いや、「お兄ちゃん。あくんして?」とか言われても困る。たぶんそれは別のキヤラだ。

ゆつくりながらもおいしそうに食べるまるの姿をみて、俺も幸せな気分になったところでもう一つ持ってきたものの存在を思い出す。

「じゃあ食べ終わったら熱測ろうな。下がってるの良いんだが。」

まあつまり何をしているのかというと看病である。

今日の朝のこと。なかなか起きてこないまるを起こしに來たら布団の中で顔を真っ赤にしてウンウンうなっていた。急いで熱を測ってみると38.9度。

夏前に海になんか浸かるからだ。元々からだが強いわけではないくせに。

食欲は十分にあるようで、持ってきたりんごは綺麗に食べられてしまった。それじゃ、熱を測って退散しますかね。

体温計を渡し、まるが熱を測っている間手持ちぶさたな俺は部屋を眺めていた。

基本的にあるのは最低限の家具と本である。余計な装飾などは一切ない。女の子らしさなどみじんも感じない部屋である。なんなら俺の部屋の方がちよつとした少女漫画も置いてあるし、知らない人が見たら「入れ替わってるく!?!」とか思っちゃうレベル。だが実際にこの部屋には見た目も中身も女の子らしいまるが住んでいるわけだ。

じゃあ女の子らしさとは何なのだろうかー。その辺りまで考えたところで体温計が測定が終わったことを知らせる機械音を鳴らした。実質何も考えずボケとしてただけとも：誰がボケじゃ！（セルフ乗り突っ込み）

自分のモノローグのあまりの面白くなさに震えながら体温計を受け取る。液晶には38.4の文字。

「うくん。下がっては来ているかな？明日の学校はちよつとキツいかも知れないけど。…もう今日はお休み。」

時刻は夜の7時。さすがにまるでも早すぎる時間だが、横になって目をつむつとくだけで効果はあるはずだ。

言われたとおり布団を被り直すまるに、おやすみのキスをしようとしてそういえば風邪だったと思ひ直す。

「ごめん。今日はおやすみのキスは遠慮しとくな。」

「……………いつも…してないずら…。」

今日はいつにもましてうざかったずら、と消え入りそうな声を背に聞きながら部屋を出る。

軽口たたける元気も出てきたようで。

まるの部屋から退出した後台所で食器の片付けをしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「徳丸ー。ちよつと手が離せないから出てきて。」

やれやれしようがない。親父は風呂に入っていて出られないみたいだし。

お袋から出てきてと頼まれ、ドアを開けるとそこには手に持ったファイルで顔を隠し、体もドアの影に隠れるようにして小さな声をあげる小動物の姿があった。

ファイル両サイドから赤いツインテールが見え隠れしている。

「あ、あの。花丸ちゃんに今日の学校のプリントを届けに来たんですけど…。」

というかルビイちゃんだった。

応対したのが俺だったから良かったものの、父だったら悲鳴を上げて逃げ出したのではないだろうか。良かった。一人の少女の平穩が今ここで守られたようだ。

ルビイちゃんはファイルで顔が隠れてるからこっちが誰なのか分からないのではないだろうか…？

俺はちよつとイタズラ心を働かせて親父の声真似を試みる。

「んんっ。ありがとうね。花丸はまだ寝込んでいて会えないんだが上がっていくかね？」

「徳丸さんっ！」

ありや。一瞬でバレた。

ドアの影からぴよこつと顔を出すルビイちゃん。顔を隠していたファイルをなくすと、そこには満面の笑み。うん。優勝。

もうぴよこつと顔を出した時点で審査員的には10点だね。『ぴよこつ』がポイント高いよ。

「いんげんはー！」

「はこ、いんげんは。」

ああ…。妹に欲しい。

「花丸ちゃんまだ熱下がらないんですか…?」

「うん。朝よりは多少マシになってはいるんだけど。明日まではとりあえず休みかなあ。」

「そうですか…。」

プリントを届けたらすぐに帰るということで、ちよつとだけまるの容態について玄関で話す。

途端に暗い顔をするルビィちゃん。心からまるのことを心配してくれているのだと分かる。

まるから聞いた話だと、この二人は中学生からの付き合いで3年間ずっと同じクラスだったとのこと。

まるをA q o u r s に誘ったのもこの子だという話だ。

今ではこうして家が遠いにも関わらずプリントを届けに来てくれている。

我が妹ながら良い友達を持ったものだと思う。

妹に欲しい。

「もうこんな時間だ…。じゃあ花丸ちゃんによろしくお願いします。」

しばらく話し込んだ後時計を確認したルビィちゃんは、そう言って頭を下げた。

俺も見てみると時刻は8時を大幅に回っている。意外と話し込んでしまったらしい。「じゃあ帰ろうか。」

「へ？」

俺の言葉に首をかしげるルビイちゃん。

「…いや流石にここでさようならとはいかないし。」

ここから黒澤家まではバスで15分くらい。歩けば40分はかかる。多分バスもすぐには来ないだろうから送れるところまで一緒に行こうと思ったのだが。

案の定ルビイちゃんはぶんぶんと首を振って「遠慮します〜！」と言ってきたが、そこはごり押しする。もし一人で帰らせて何かあつたら…不安で夜も眠れない。

姉に叱られるという意味でも不安で眠れない。

自身の帰りのために自転車を押しながら、隣を歩くルビイちゃんと何気ない話を続ける。

「お姉ちゃんは一緒じゃないの？こんな夜に一人で来させるとはとても思えないんだけど。」

「お姉ちゃんはお父さんと一緒に地区の会議に出ています。今日は帰り遅いみたいで。」
「そうか。跡継ぎの役目があるのか…。あのひとポンコツっぽいけど、意外としっかりしてるからなあ…。」

生徒会長もして、家の役目と家柄にふさわしい習い事をして。なんてハイスペックな人なのだろうか。

そんなことを口に出すと

「自慢の姉です!」

そう口にするルビィちゃんは姉と一緒にいないのにも関わらず嬉しそうだった。この子もこの子で人見知りっぽい…というか人見知りだけど、自立し始めているのかも知れない。

おれも「自慢の兄ずら!」と言ってくれる妹が欲しかった。

「こんなに思われててダイヤさんは幸せ者だね。俺もルビィちゃんを妹にしたいよ…。」
思ってたことを口に出すと、困ったように俯かれてしまった。

照れちやつたのかな…?

「それはつまりお姉ちゃんと結婚したいってことですか？」

「……………はい？」

「だって私を妹にしたいってことはつまりそういうことなんじゃ…。」

まさかそんなことあるわけないじゃないですかー（汗）

まさかの切り返しに思わず足が止まる。

あの人と結婚…。そうか。そうすればカワイイ義妹がセットでついてくるのか。

…一瞬朝起きたらルビイちゃんが「朝だよ。起きて。」と言ってくる場面を想像したが、すぐに「朝ですわよ。起きなさい。」と言ってくるダイヤさんを想像して身震いし……………案外悪くないかも知れない。

「いやないないないない。」

あぶねえ…。今何を考えてたんだ俺は…。

「俺は義妹目当てで結婚するような人間じゃないよ。愛のない結婚はしたくないんだ。何を言ってるんだろう。」

『ルビイちゃんが妹に欲しい。ダイヤさんを嫁にしたい』と言う凶式が俺の中でできあがってしまって、テンパって変なことを口走ってしまった。今後ルビイちゃんを妹に欲しいとは（特にダイヤさんがいるところでは）うかつに口に出せないな。

「…良かった。」

「え？…なんで？」

聞き返すとんでもないと言われた。

そんなに俺が義兄になるのが嫌だったのか…ヘコむ。

そう言っただけで落ち込んだ姿を見せると慌てて「そうじゃない。そうじゃないんですっ！」とフオローしてくれた。まあ！なんて優しい子。

「…冗談はさておき、妹にしたいってのは『こんな優しい子なら一緒にいたいな』って思ってるだけだよ。」

お兄ちゃんと呼ばれたいの会』会員の皆さんである。…実在するのは知らんが。

「じゃあ、またね。」

「はい。おやすみなさい。送っていただいてありがとうございます。ありがとうございました。」

挨拶を告げて、出発する。さつきルビィちゃんが言った「お兄ちゃん」だけを切り取って脳内再生しているため、ハッピーな気持ちで今日は寝ることができそうだ。

徳丸さんが見えなくなった後。

「妹とかじゃない。私は徳丸さんの妹になんかなりたくないんです。」

「隣に…並んで立ちたい。」

そう呟く私がいきました。

文化祭は一日で終わるので前夜祭とかやったことなかったなあ

まるの風邪が治って数日：と一日。俺は一人で町内会を訪ねていた。

いつもは、隠居している老人たちがゲートボールや絵はがきなどの集まりを開いているが、毎年この時期になると若者たちも集まり、にわかには活気づくようになる。

その中の一人のTシャツには『夏祭り実行委員会』の文字。

そう。季節は夏。夏と言えば浴衣と花火と夏祭りである。

がやがやがや。いつもののんびりとした雰囲気はどこへやら。雑多な音があちらこちらから聞こえてくる。

十数名が段ボールを開いたり、各所に電話をかけている中、俺は大きな声で支持を出している老人のもとに案内された。

「こんにちは。あの、今度の祭りのステージでライブをさせていただきますAquoursと申します。今日は打ち合わせに参ったのですが。」

「ん？ああ、兄ちゃんがああスクールアイドルってやつかい。」

紹介されたその老人の肩書きは町内会長。この祭りの総合責任者である。ここから始まるシンデレラプロジェクト！

：いやまあここら辺ではかなり大きな祭りだから成功すれば有名になるってのは正しいんだが。

「いえ。私はマネージャーみたいなので…。今日は皆都合が合わなかったものですから。また顔を揃えて挨拶には伺います。」

「それは良かった。俺もカワイイ女の子たちが踊ったり歌ったりするっていうから許可出したんであって、男の踊りを見ても何も楽しくねえからなあ。」

えらく正直なおっさんだな！……激しく同意するけれども。自分がステージでふりの衣装を着て踊っている姿を想像し、一瞬で消し去る。誰得だよ…。

こんな人が責任者で大丈夫なのかと思つたが、気にせずに打ち合わせに入った。

途中途中いろんな人が指示を仰ぎにくるところを見ると、どうやら信頼はあるみたいだし。

「そいで？打ち合わせに来たんだっけか？」

「はい。具体的な時間やステージの広さなどをお聞きしたいです。」

「おう。この紙に書いてあるんだがお前さんたちの出番はここからここな……………」

その後20分程話し、大体の流れは掴むことが出来た。

この場にいるだけでもかなりの人数なのだが、それ以外の多くの人も、この祭りをより良いものになりたいと思っている。そんな大きな舞台に出させてもらえるんだ。あいつらにとつても良い経験だろう。

「ありがとうございしました。自分たちのステージだけでなく、この祭り自体が成功するために私たちに出来ることがあれば何でも言ってくください。」

「おう！毎年なんとかなってるから今年も大丈夫だろう！」

そう言いながら壁に掛けてある毎年の写真に目を向ける会長。

俺も釣られて眺めてみると一つの写真に目がとまった。

2年前と書かれた写真には俺もよく見知った3人の少女達が満面の笑みで写っている。そこに写る姿は今よりも少し幼く、そして眩しく見えた。

「…あそこに写ってる3人もスクールアイドルだったのですか？」

「ん。そうだな。お嬢ちゃん達はたった3人だったが、可愛らしい歌と踊りで大人気だったぞ。ステージは1日目の最後だったんだが、口コミで噂がすぐに広まったらしくてな。2日目には嬢ちゃん達見たさに遠くからも人が来たほどだ。おかげで祭りも大成功だったよ。」

そう…なのか。あいつらもこの祭りに出てたのか…。

意外なところで友人達の過去の姿を見てしまったことに少し戸惑ってしまう。

ダイヤさんから少し聞いてはいるが、一番仲が良いマリーからは何も聞いちゃいないのだ。松浦さんなんてスクールアイドルの話題をしたことも…。いや、なくはないか。

出来れば本人たちから詳しくは聞きたいし、でも地雷を回避するために会長さんから話を聞きたいとも思ってしまう。

…聞かないけどね！

でも、彼女たちがかなりの人気者だったという話を聞いて、なぜか少し誇らしくなったりもした。自慢の友人たちである。

「今度来る女の子たちもちゃんと可愛いんだろ？」

「可愛いですけど、セクハラとかしたらぶっ飛ばしますからね？」

：急に夏祭りの話に飛んだのにはちゃんと理由がある。安心して欲しい。久しぶりすぎて前回の話がどんな話だったかも忘れてしまっているだろうが、全く脈絡などないので大丈夫である。

話はつい先日。千歌ちゃん宅の旅館からスタートする。

花丸の風邪が治ってから数日後。いよいよ夏が本気を出してきて冷房や扇風機が我が家でも稼働し始めた頃。

旅館『十千万』の一部屋を借りてA q o u r sの話し合いが行われていた。なんでも地元で行われる夏祭りに出てくれないかと話が来たらしい。

着々と知名度も上がってきているようだ。夏祭りのステージで披露するなんてちよつとした有名人レベルだし。

ただ、そのオファーが来たのがつい先日。十分な準備期間は残されているとは言えず、考えなしに参加を決めるのはどうかという意見が出た。

これはネガティブな意見というか、ベストなパフォーマンスが出来ないのではないか、という気持ちなんだろう。

最終的な意見はリーダーである千歌ちゃんに委ねられたのだが……………。

「私はやりたい…かな！」

千歌ちゃんはその意見に反対して、参加したいと言った。

……あまりみんなと反する意見を言ってこなかった千歌ちゃんがそう告げたのは…少し…意外だ。

どういう心境の変化なのだろうか。

「千歌ちゃんはこうしてそう思ったの？」

気になったのは俺だけじゃないらしく、梨子ちゃんがそう尋ねた。

「ええとね。別にちゃんとした理由があるわけじゃないんだけどね。」

えへへと恥ずかしそうに笑いながら千歌ちゃんは続ける。

「せつかく声をかけてもらえたんだし、今の私たちをもっと知ってもらいたい機会だと思っただ。ダメだったらその時はその時だよ。」

やっぱり少し変わったな。

たぶんこの前の一件からだと思うが、他人の顔ばかり伺わなくなっただというか。元々そうでもなかったけど、末っ子は他人の表情を読むのがうまいと聞くしね。

メンバーに自分の意見を言っても大丈夫なんだって分かったんだろうな。いい成長ですこと……！

「と、いうわけでA q o u r sがこの近所で一番大きい夏祭りに参加することになりました〜！」

そう千歌ちゃんが言うと、周りから拍手が起こった。

梨子ちゃんや1年生組も千歌ちゃんが少し変わったことに対して気づいているようで、ほほえましい笑みを浮かべていた。曜ちゃんにいたっては「昔は引っ込み思案だつ

たあの子が…こんなに大きくなって…。」と涙を流していた。その領域までの愛はちよつと引く。

理想の幼なじみとは『けいおん!』の唯ちゃん和ちゃんくらいがちよつど良いと思う。異論は認める。

「よし!それじゃ本番に向けて練習頑張ろう!」

「」「」「おぉ〜!」「」

以上。回想終わり。

我らがリーダーの成長に目頭を熱くさせながら、A q o u r s は祭りへの参加を決めた。今日は学校が早く終わった俺が代表として挨拶に来たということである。

「さてと、そろそろあいつらも練習始めてるころかな…ん?」

町内会を後にした俺は浦の星へと足を向ける。

打ち合わせが済んだことを連絡しようと思いLINEを開くとちよつどそのタイミングでメッセージが届いていた。

差出人は千歌ちゃんだったので、ちよつどいいと思いい内容を見てみると

『助けて！ラブラブ…じゃなかった。徳丸さん！助けてください！部室が大変なことに！』

Today, Tomorrow, Yesterday

『助けて！徳丸さん！』なんていうメールが千歌ちゃんから送られてきた。文面的にかなり深刻な案件……ではないと思うけれど。

それなりに慌ててスクールアイドル部の部室に飛び込むと、そこにはAqoursの6人の他に3年生3人の姿があった。あら、3人揃ってる。

「だからスクールアイドルなんてもうやらないって言ってるでしょ！しつこいよ！」

「こんの意地っ張り！一回の失敗なんて気にしなくていいのよ！果南なら大丈夫だってば！」

中でもマリーと松浦さんが中心となり言い合いを繰り広げている。ダイヤさんをはじめとした他のメンバーはおろおろと見守っている。呆れているっぽい雰囲気もあるかな。

激おこな二人に気づかれないようにこっそりと部室に潜り込み、とりあえず今の状況の説明を求めてみた。

「ねえねえ梨子ちゃん。これどんな状況？」

「あ、徳丸さん。お久しぶりです。」

お久しぶり…。そんなお久しぶりではないと思う…。はい…。そうですね。遅くなりましたね。すいません。

「今日から果南ちゃんが復学したんですよ。実家のお手伝いとかで忙しかったらしくて休学してたから。」

曜ちゃんが教えてくれた。それに続き1年生ズも経緯を口にする。

「ことの始まりは3年生の教室で先輩たちが言い争ったことすら。私たちの教室まで届くくらいの大声で。」

「そこに千歌ちゃんが割り込んでいって『放課後部室に来てください。話聞きますから』って。か、かつこよかった。」

「それで、場所を変えたは良いんだけど結局あの調子で…。困ったリトルデーモンたちね！」

なるほどなるほど。それじゃあ千歌ちゃんが俺を呼んだのはあの言い合いを止めてくれたってことなのかな。言われなくても察することは出来たけれど…。

(首ツツコまない方が良いと思うんだけどなあ)

コレが今の正直な気持ちである。

彼女たち3人(ダイヤさん含め)は2年近く冷戦状態にある。確かに松浦さんとマリーが揃うというのはなかなか無い良い機会だと思うが、だからってすぐに溶けるほど

のわだかまりならこんなに拗れてないだろうし…。

(2人とも腹割って話せる方法がなにかあればなあ…)

そのまま気づかれずに傍観してること数分。もう何度目かも分からないやりとりを繰り返す2人。

「だから！一回の失敗で辞めちゃうなんて果南らしくないって言ってるの！もう一回私やちかっちと一緒にスクールアイドルやろうよ！」

「いやだ。」

「くくくくくつ！この意地っ張り！弱虫！せつかく私が誘ってあげてるのになんで素直にならないの!?!」

ま、マリーさんや。今のはちよつと言い過ぎとか言い方が悪いような気が「せつかく私が？」ほらあく泣

しびれを切らしたマリーの尖った言い方を松浦さんは聞き逃さなかつたようです…。

ゆらりと立ち上がった果南さんが「バンツ」と音を立てて両手をテーブルに叩きつける

「あんたには私の気持ちは分からないよ。」

とだけ告げて部屋から出て行った。

嫌な空気が部屋を満ちた。マリーは特に「あんた」呼ばわりが聞いているらしく開いた口がふさがつていなかった。

松浦さんの後を追おうと俺が動き出そうとすると

「徳丸さん。果南ちゃんのことよろしくお願いします。追いかけてあげてください！」

と、沈黙を破ったのは俺に気づいていないと思っていた千歌ちゃんだった。

その事が意外に思えたので、部屋を出る前に俺のことを呼んだわりに今まで放置されてた理由を聞いてみると

「徳丸さんは最終手段でしたから！こういうのは本人同士じゃないとダメだと思ったから。まさかこんなに2人とも素直じゃないとは思ってなかったですけどね!!」

と、単なる仲介役を俺に頼むつもりじゃなかったらしい。

やつぱりこの子は人間関係を理屈ではないにしろ感覚的に理解してるし、そういう点でリーダーに相応しくなってきたじゃないか。

じゃあリーダーに頼まれたことは遂行しないとね。

「行つてきます」

なんとか…なんとか追いつけたが、限界を超えた気がする。

「ぜえっ…松浦さん…話したいことがあるんだ…けど。」

「けど？」

「も、もう少しだけ待って…。」

締まらないなあ。

とりあえずちようど良いところにバス停があつたからそこに腰掛けて回復を待った。

「はいこれ。」

「あらら。ごめん、ありがとう。いくらだった？」

「大丈夫だよ。これくらい。」

飲み物を買ってきてくれた彼氏と申し訳なさそうな彼女の会話のテンプレート①である。性別がそれと逆なのはお察し。

買ってきてくれたスポーツドリンクを半分くらい一気に飲み干したあと（もちろん代金は払った）真面目な話に入ろう。

「君たちがスクールアイドルしてたとき会ったのは覚えてる？」

「うん。マリーが『紹介したい人がいる』って連れてきたから最初彼氏だと思った。」

「ああ、それでダイヤさんが『ア、アイドルに恋愛は御法度ですわ〜！』って大騒ぎして

な。」

「…懐かしいね。」

「あのとき。笑顔で冗談を言い合う君たちを見たときに。俺はなんて思ったと思う？」

「ええええ。なんだろう。”眼福”とか？」

「違うわい！」

……ホントに違うわい！

「…一つはね。マリーに友達が出来て良かったなってこと。もう一つはね”羨ましい”

だったんだ。」

「羨ましい？」

「うん。すごく楽しそうだったもん。」

ただそれだけのことで。

「俺はアイドルとかよく分からないけど、どんなことがあってもこんなに仲の良い3人

なら乗り越えてゆくんだらうなって思ったよ。」

彼女たちから元気をもらえた。

笑顔で歌って踊る君たちを見て、俺も新しい場所仲間を作ろうと思った。

「君たちは間違いなく俺の憧れの偶像アイドルだった。こっそりライブにも行ったんだぜ？」

だからさ。

「別にアイドルをもう一度やって欲しいとも言わないし、無理に仲直りしろとも言わない。ただ、何を思っただスクールアイドルを辞めたのかを教えてくださいませんか？」

教えてくれないかな？

そう尋ねてきた彼の優しい声に、真面目な話をしているのに何を考えているのかと思うかも知れないが、なぜかドキンと胸が高鳴るのを感じる。

放課後のバス停のベンチに二人して腰掛けて話す今の時間というのは、なんだかとても貴重なもののように思えた。

……うん。思い返すと二人つきりでゆっくり話す時間って今まであまり無かったからだろう。柄にもなく緊張しているのかもしれない。

さて、真摯に私に向き合ってくれる国木田くんに理由を話すべきかな。

私がスクールアイドルを辞めようと決心したのは、東京のスクールアイドルに圧倒されたとか、失敗が怖いとかそういうことじゃない（鞠莉は勘違いしてるけど）。

私の大事な親友はこんなところでスクールアイドルをしてる器じゃない。家だってお金持ちだし、世界にコネはたくさんあるし、もつと世界で活躍できる人材だから。

それなのにあの子は“今”やりたいことしか見てないから……。だから私はあの子の“未来”を考えて突き放した。

たった3年の間やりたいことを我慢するだけで、彼女はその後の人生でもつと素晴らしいことに出会えるはず。もしかしたらその3年の間にやりたいことを見つけられる

かも知れない。

それが彼女の幸せだと思うから。

目の前の彼はわかってくれるだろうか。

わかってほしい。いや、わかってくれるはずだ。

スクールアイドルなんて頑張って頑張って。それこそ自分の時間を削ってまで練習して。全国優勝したところで。

得られるものは経験と学校の知名度と思い出だけ。

後輩のため、学校の歴史を残すために頑張る千歌たちのことを悪く言うわけではないけど。

私は会うこともない後輩や、学校の存続なんてものよりも。

「親友の将来の方が大事だから。」

そう伝えた。

番外編

成人の日特別編 最終回じゃないよ！ちがうからね！

「徳兄い。もう8時だよ。みんな迎えに来るよ？」

まるの声と布団の上から揺すられる感覚で目を覚ます。いつの間にかカーテンが開けられていたらしく、1月の眩しい日差しが部屋の中に差し込んでいた。いやしかし妹の目覚ましボイスというものはどんなにうるさいベルの音よりも効果があると思うんだ。商品化してくれないかなあ。サンライズさん。

んんーっと両手を挙げてのびをする。昨日は夜遅くまで友人達と盛り上がっていたためまだまだ寝たりない。そう思いながら時計を見るとまるの言うとおり針は8時を指していた。

どうやら2度目の惰眠をむさぼる時間は俺には残されていないらしい。

今日は8時45分に公民館に集合だから、余裕を持って30分前にマリー達を迎えに来る手はずになって…今8時？

「やっばいじゃねえか！」

急いで布団から飛び出し、傍らに立つまるに何でもっと早く起こしてくれなかったのかと目線で訴えるが

「昨日『まるは起こさないからね』って言ったのに『大丈夫だ。がはは』とか言ってたのは徳兄いずら。今日だってお母さんが起こしてって頼んで来なかつたら起こす気はなかったのに…。」

などとちよつと遅めの思春期に入ってしまった花丸ちゃんにはそんな抗議の意味も無いようで、淡々とそう言われた。

「じゃあまるはルビイちゃんと善子ちゃんと図書館で勉強してくるから。じゃあね。」
「そう言い残して部屋を出て行ってしまった。行ってらっしゃいを言う暇も無かつたぞあのやろう。」

まあ試験が近くなってきてピリピリしているということを考えれば仕方な無いことなのだろう。受験生だものね。

……さて。着替えなければ。

”ぴーんぽーん”

8時15分ぴつたり家のチャイムが鳴らされた。まず間違ひなくあいつらだろう。こちらはやつとスーツに着替え終わったところで、あと5分くらい準備に時間がかかりそうである。

「お袋！あと3分待つててつて伝えて！」

そう部屋から叫び、持って行くものを鞆に突っ込む。成人式なんて参加するの初めてだから（当たり前）、何持って行けば良いのか分からないけれど…。とりあえずスマホと財布とハンカチくらいで良いだろう。

最後に鏡の前に立って確認する。

2年間。この家を出て一人暮らしを始めてからもうそれだけの時間が過ぎた。けれども鏡に映る自分は少しも成長していないような気がする。

ふと目を閉じて高校生だった頃を思い出すと、一番に浮かんでくるのはA q o u r s のこと。もう今となっては9人のうち6人が浦の星を卒業してしまっただが、なお語り継がれているスクールアイドルのこと。

（そんなやつらと一緒に駆け抜けたんだよなあ。俺は。）

今までの人生、とは言っても20年ほどだが、の中で最も楽しかったと言っても過言

ではない時間を過ごさせてもらった。

(久々に会ったらなんて言われるだろう…?もしかしたら変わってないと思ってるのは自分だけで意外と俺も変わってるのかもなあ。変に遠慮されたいやだなあ…。)

そんなことを思いながら鏡の前から離れる。そういえばあいつらを待たせているのだった。

俺は急いで家の扉を開けたのだった。

「さ・む・い・の・よ!さっさと出てきなさいよこのアホ徳丸!」

「……………はい。すいませんでした。」

遠慮など無かった。

2年ぶりに会ったマリィからの第一声がコレである。

「あなたさつき『あと3分待つて!』つてさけんでたわよね?あれからもう10分以上すぎてるんだけど!?!」

鏡の前で黄昏れてたときに思ってたよりも時間が過ぎてたようで、ちよいおこなマリイだった。

「まあまあ。どうせ遅れてくるだろうって話してたし、分かったことじゃない。そんなことよりほら、会場でダイヤが待つてるから早くいこ？」

そんなマリイを止めてくれたのが松浦さんだった。フオローになつてないフオローをありがとう！

寒い中3人で仲良く会場への道を歩き始める。

少し話をして思ったのは二人ともラインやTwitterなどで話してはいたし今何をしているのかとかは大体把握していたのだが、実際に会ってみると変わっていないなうということだ。

もちろん見た目も中身も変化してはいるのだろう。うっすらと化粧もしているし、すこし大人びたような印象がある。

でも二人ともあの頃の明るいマリイと優しい松浦さんのままだった。

「しかしトック―が県外に行くとは意外だったわね。てつきり花丸ちゃんから離れたくないとかそういう理由で実家に残りそうな気がしたんだけど。」

「それを言うならお前が海外に行ったのだって相当だろ。俺の場合は心からやりたいことが見つかったってだけだ。」

「まったく皆して地元出て行っちゃうんだから。寂しいんだからもっとちよくちよく帰ってきてよね。」

「ごめんごめん」

「あ、帰ってくる気無いでしょ二人とも。」

こんな風に話していると昔に戻ったような：感じは不思議とあまりない。

どちらかといえば昨日も一昨日もこんな風に一緒にいた気がしてくる。これが親友というやつなのだろう。

「あ、そういえば徳丸くん。寝坊したのは別に怒らないけど、会場つくまでに言わなければならぬセリフを言わなかったら、私とマリー本気で拗ねるから覚悟してね。」

「なんなら親友やめてやるわ。」

今お前達は親友だって心の中で再確認したとこなのに!?

「ええ：なにそれ。久しぶりとか?」

「違う。」

「おはようとか」「違う」「彼氏できた?」「殴るよ?」「目が怖いよ。ハイライトが仕事してないよ。」

わっかんねえよ…。ヒントは?。

「いつもの私たちと違うところがあるでしょう?」

2年も会ってないからいつもって言われても分からないんだけどな…。

そう思いつつも2人の姿をゆっくりと観察してみる。ああ確かに改めてみると女の子には言わなきやいけないことがあったな。

「髪切った？」

……………。

「ごめんごめん冗談だから許して！着物でしょ着物！似合ってるよ！めちやくちやかわいい！」

せっかく平日の昼十二時からあつた長寿番組の某グラサン司会者風に言ってみたのに…。スルーしやがって。

まあ冗談はさておき、二人とも成人式ということで着物を着ていた。

マリーはピンクから紫へのグラデーションが鮮やかな花柄の着物。所々に『鞠』がデザインされているのは本人なりの遊び心だろうか。髪もいつもの編み込みだけではなく、それに加えて後ろ髪をまとめてお団子のようにしている。さつきコイツの後ろを歩いているときに思ったが、真っ白なうなじがなんていうか…色気がありました（小声）

松浦さんは深い蒼の色に真っ白な大輪の花が映えている着物。昔よりまた少し伸びた黒髪が着物という日本の文化にマッチしていて、大和撫子って感じがする。髪飾りも小さなティアラのような形でよく似合っていた。昔から着物には小さい方がよく似合

うというけれど大きくても（以下自主規制）

「それで? 私と果南の晴れ着姿を見て言うことはめちやくちや可愛いだけで良いのかしら?（充分なのだけれどどうせならもつと言って欲しいじゃない!）」

「(まったくマリーったら欲張りなんだから。でも) そうだね。私たち一生懸命準備したんだけどなあ…。」

二人とも微妙にほほを赤らめながら催促してくるが、心の中で散々褒めてるからね? ただ口に出せないってだけで。

だって正直に言ったらちよつと怒られそうな気がするから…。

「ほら、遅れちゃうよ? 早く行こう?」

そう言って逃げ出したヘタレがいましたとき。もちろん後ろから「「ぶーぶー」と不満の声はついてきたけど。

「でもホントに綺麗だよ。」

ボソツと呟いておいた。そういうこと面と向かって言えるほどまだ大人じゃないんだなあと思いました。

予定より少しだけ遅れて公民館の入り口に到着する。ここにもう一人会わなきやいけない人が待つてるはずなのだが。

ちよつと見回してみると同じようにキョロキョロしてる人を見つけた。相変わらずオーラが…あれ？

その人がこつちに向かつて走り寄つてきて。

「おつそ……い！ですわ！」

と大声で叫んだ。皆から注目される俺たち。

「まったく。早く来てくださらないと寂しいじゃないですか！ただでさえ新成人代表としてご挨拶しなければならぬのに、さらに不安にさせないでください！」

「……。」

「卒業以来この4人が揃うつて言うのに私だけ遅い集合つてちよつと辛かつたんですか
らね？そりゃあ式の中で大事な役目を受けたからしょうがないんですけれども。」

「[[[……]]」

「ちよつと聞いてますの?」

目の前の大和撫子ダイヤさんがそう尋ねてきたところで我に返った。

ダイヤさんは真つ赤な振り袖に黄色の帯。模様はツツジの花…だろうか?花が至る所に咲いている。顔の作りや髪型、身長などは2人以上に変わってないと思うが、着物を着ていることよってオーラというか、存在感が違った。どこの芸能人かと思った。…流石名家の娘。

とりあえずさつき怒られたので最初に着物について褒めておく。

「あ、ああ。聞いてるよ。ちよつとダイヤさんの晴れ着姿に見とれていて。とつても綺麗だね。」

口説いてるのか

なぜかそんな歯の浮くような台詞がすらすらとでてきてしまった。見とれていた部分は言い訳のしようのない事実なので、思考が停止していたのかも知れない。

その結果

「ぼふんっ!」

漫画みたいな音を立ててダイヤさんが頭から煙を出して倒れた。だ、大丈夫ですか…

?

急いでマリーと松浦さんが近寄って抱き起こすと、意識が戻ったよう

「はっ……。今徳丸さんに口説かれる夢を見ていた気がするのですが。」

「それは夢じゃな」「それは夢よ。今すぐ忘れなさい。……。」

必死な表情の2人に何か感じ取ることがあったのか、ダイヤさんは何も追求せず素直に立ち上がった。2人の俺を見る目が怖い。今日何度目だろうか。

そんなことよりと、久々の挨拶を交わす3人。俺は外から傍観してるだけだが、なかなかの盛り上がりだ。決して会話に入るタイミングを伺ってるわけではないぞ！べ、別に構って欲しいわけじゃないんだからね！

10分ほど（彼女たちが）話し込んでいると館内放送が間もなく式が始まることを告げた。

「あ、じゃあ私そろそろ舞台袖に行きますわ。」

「そうだね。ダイヤの名演説期待してるよ。」「ベリーベリーファンタスティックな式にしてちょうだいね?」

「2人ともプレッシャーかけないでいただけますか!」

さて、俺たちもそろそろ行かなきゃな。

「ダイヤさん頑張つてね。」

そう背中にも声をかけると彼女は拳を高く突き上げガッツポーズして去って行った。

なにあれかつこいい。

式はつつがなく進行した。市長の話や市民団体の様々な出し物。さらにダイヤさん

の演説も素晴らしいもので、俺たちの門出を祝うものとして最高だったと思う。

「き、緊張しましたわ〜。…」

「ダイヤ、お疲れ様。ハグしてあげよっか?」

「お願いしますわ…。…」

公民館から外に出た俺たちはダイヤさんと合流し、ある場所に向かっていた。

そのこの2人。ハグしながら歩くとかいう器用なことはやめなさい。怪我するでしょう。

朝は俺も会話に混じって話していたが、今は3人の後ろをのんびりと歩いてるだけだ。さっきは俺も混ざりたいなんて言ったが、実際はこのままで充分楽しい。

時折聞こえてくる昔の思いではそこにいなかった俺にもありありと思いつけるほど具体的で、面白くて、楽しかった。

いろんな話を聞くことが出来たがその舞台の多くはやはりここだった。目的地について足を止める。

彼女たちの青春の場所。そして俺にとっても大事な場所。

浦の星女学院。

「懐かしいね。もうここに入学したのは5年も前なんだよ?」

松浦さんの台詞でダイヤさんとマリーも懐かしむように目を細める。

入学し、仲良し3人組でスクールアイドルを結成。一度は疎遠になったものの後輩達
の力も借りて9人となって生まれ変わった。そして――

「3人は過去に戻りたいと思うか？」

ふと気になったので問いかける。

「今の生活に不満があるってことはあんまり無いと思う。でも嫌なことだつてあると思
うんだ。それなら数年前に戻つてやり直したら今度は上手くいくかも知れない。もし
かしたら別の道を選ぶかも知れない。それに」

「あの頃の楽しい時間をもう一度体験できる。ですか？」

「うん。まあね。今ここに立つとあの頃は楽しかったなあつてばかり考えちゃうんだ。
みんなとバカやって、一生懸命練習して、試行錯誤して。なんか充実してたなあつて。」
「だからもう一度高校生活をやり直したいって思うかなとね。聞いてみたんだけど。」

3人とも思うことは確かにあるのだろう。俺を含むみんなが別々の道に進み、お互い
会うことも少なくなった。悩みだつてあるだろうし、これから出来ていくだろう。心か
ら泣くことももしかしたらあるかもしれない。けれど。

「今のままで良いわ。」「私も。」「私もですわ。」「

こうやって一致するんだよなあ。

「おっけ。理由はなんとなく分かるからいいや。」「

これから俺たちは成人として社会に出て行く。過去を振り返るときだってあるだろう。それでも前に足は進めていく。

見たことない夢に向かって。

if route ① く中途半端に親密度上げてるとハーレムにもなりきれずに友

情エンドで終わるよねく

e n d i n g